



むくどり通信

2017. November

No. 250

11

日本野鳥の会大阪支部
大阪の野鳥と自然を見つめ80年

むくどり通信 250号記念特集 **むくどり通信 アーカイブス**

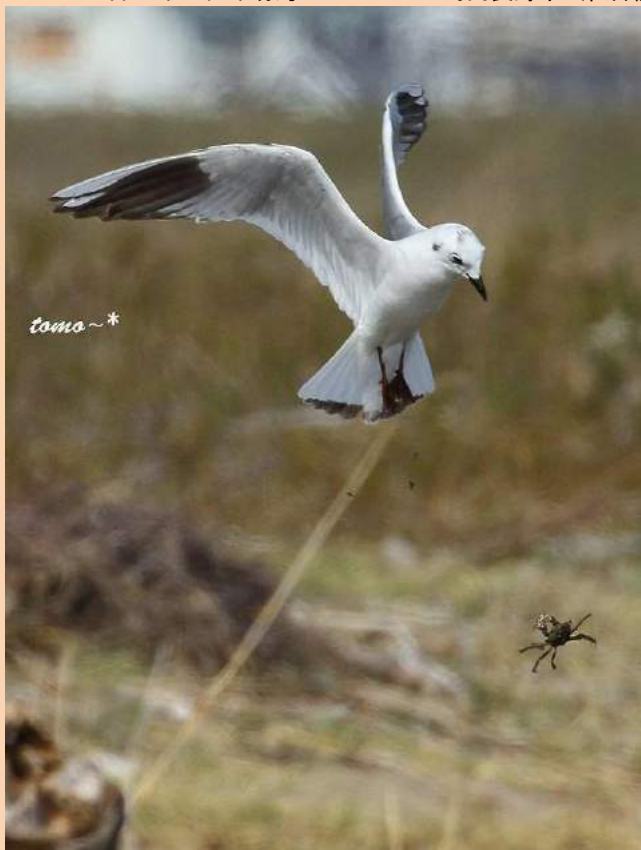




セーフ!! キビタキ幼鳥 2016. 8. 7 河内長野市 (松井謙友)



暑いなあ カワセミ 2017. 7. 22 堺市南区 (松井文子)



tomo~*

しまった!!! ズグロカモメ 2017. 4. 1 兵庫県 (酒井友子)



ミサゴ オオタカ幼鳥(下)にアタック 2016. 11. 13 大阪南港野鳥園 (田中 宏)

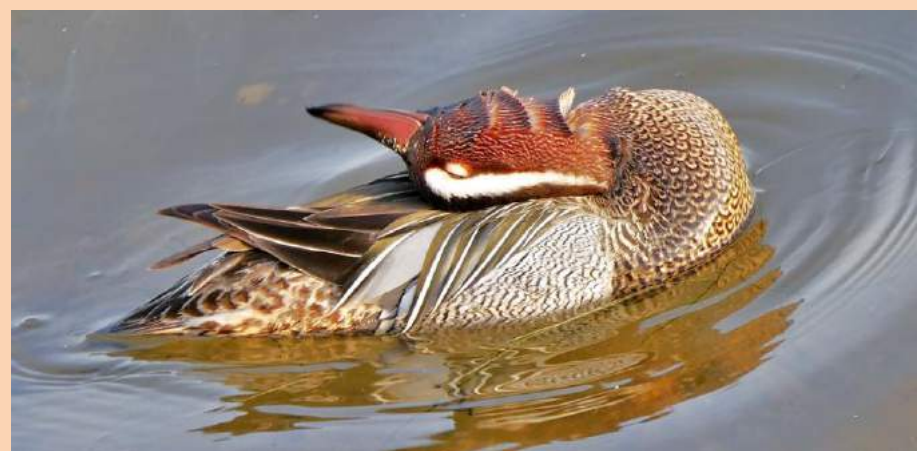
CONTENTS 2017.11 No250

- 2 にとっておきの野鳥写真発表会入選作品
- 4 特集 むくどり通信アーカイブス
- 14 むくどり通信バックナンバー頒布
- 16 むくどり通信のこれから
- 17 身近な鳥から鳥類学 第39回 スズメの繁殖期
- 18 バードコールをつくろう教室/会員専用HP開設
- 19 そんぐぼすと/ニュースクリップ/本紹介
- 20 例会報告
- 23 観察レポート カモの親子/シロガシラの繁殖
- 24 鳥信 こんな鳥観たよ ヒメアマツバメ他
- 26 幹事会報告/保護活動
- 27 次号予告 / 編集後記
- 28 鳥とり イベント情報

※探鳥会の案内は別刷

■表紙の写真 ねぐらに向かうユリカモメ

- ①強風時 2012.1.9 ②夕日を受けて 2010.1.17
 - ③月をバックに 2007.11.23
 - ④大阪湾上空 2012.4.1 全て大和川河口 (岡林 猛)
- 海上のねぐらに向かうユリカモメの生態をとらえた作品(組写真)が一番人気でした。



柔軟体操 シマアジ 2017. 4. 30 岸和田市久米田池 (納家 仁)

2017年8月19日の野鳥写真大発表会に出展された作品約200点の中から人気投票で上位を占めた作品12点を紹介します。面白い行動や鳥の美しさや可愛さがとらえられたものが多く集まりました。

皆さんの出展作品は、支部ホームページ「にとっておきの野鳥写真」で公開中です。ぜひご覧ください。なお、むくどり通信への掲載にあたっては、作品を一部トリミングしていますことをご確認ください。



クマタカ 巣の周りを巡回中の親鳥 2017.3.18 滋賀県 (阪上幸男)



ハヤブサ 上手に飛べるようになったね 2014.5.31 泉大津市 (松井謙友)



ハスの上のスズメ 2017.6.11 大泉緑地 (藤川 薫)

とっておきの
野鳥写真
2017.8.19
納涼
野鳥まつり



サンショウクイ 格好よく止まったよ 2016.8.20 和泉葛城山 (松井謙友)



マヒワ 2012.10.14 羽曳野市 (上村 賢)



清流に ヤマセミ 2017.4.3 三重県 (福田幸充)



アトリみ 同じ色だな?! 2017.2.18 山田池公園 (松下孝雄)

「むくどり通信」 アーカイブス

1977年4月に創刊号が発行されてから40年、むくどり通信は今回で250号となりました。

250号記念特集としてむくどり通信の歴史を振り返るとともに、過去の通信を読み返し、これはという記事を見編集者の独断でセレクトし、改めて紹介したいと思います。

■むくどり通信発行の経緯と歴史

創刊号の表紙には「発行にあたって」として発行の経緯が以下のように書かれています。

現在まで大阪支部の支部報は年4回つまり3ヶ月に1回のペースで発行してまいりました。(中略)

1月29日の総会でも「支部報にニュース性を持たせて欲しい」「支部報をもっと早く」という意見がありました。(中略)そこで、2月2日に行なわれた第1回幹事会で、今年は支部報を2種類発行し、例会案内や鳥信など早く会員に知らせなければならない記事は、新たに簡単な装丁の小雑誌を作りそれに載せていくようにする、ということに決定しました。それがこの野鳥ニュース「むくどり通信」です。

むくどり通信は、1977年は2ヶ月に1度発行され、1978年10月の10号から1981年5月の33号までの間はニュース性を高めるためにページ数を減らし(B5版6ページもの)毎月発行されていました。

当時はむくどり通信とは別に年に2回程度「支部報」が発行されており、ニュースとしてのむくどり通信と読み物としての支部報という役割分担がなされていました。その後、支部報は、2009年92号の発行を最後にむくどり通信に一本化されることとなります。

2004年1月169号からむくどり通信はA4版となり、20~28ページ程度の冊子として、現在の通信の体裁に近いものとなりました。

2010年1月205号から表紙ページをカラー印刷に移行、2017年1月246号からは全ページカラー化をようやく実現できました。

むくどり通信 250号発行おめでとう

支部長 松岡 三紀夫

むくどり通信の前身の支部報は、NO. 1(1961年5月)はB5版ガリ版刷りでスタート、NO. 18(1965年7月)から印刷に変わりました。むくどり通信に変身後B5版からA4版に、そして全ページカラーと時代の要請もあつたでしょうが、見事に進化を遂げたと言えます。

私もかつて、社内報の編集に携わったこともあり、編集のご苦労も多少は分かるつもりです。

これまで、多くの皆さんがむくどり通信の編集や発行に関わってこられました。歴代の編集担当の皆さんに改めて敬意を表するとともに、皆さんに愛される「むくどり通信」として、これからも新たな歴史を刻んでいってほしいと願っています。

■創刊号

1977年4月発行

・当時の編集長は丸橋寿夫さん。編集委員は、上田恵介さんと宇恵冬美さん。「ハシブトガラス通信」にしようと強行に主張する編集長を説き伏せて「むくどり通信」とした功労者は上田さんとのこと。



「むくどり通信」の名は・・・元祖は大阪支部

インターネットで「むくどり通信」と検索すると、一番にヒットするのが作家の池澤夏樹の本(この関連のものが3つ並び、大阪支部のむくどり通信は4番目に来る)。

これは、1993年1月~12月まで週刊朝日に連載されていた人気コラムをまとめたもの。旅と自然を愛する著者がむくどりの好奇心で綴ったエッセイ。

シリーズ本として

- 「むくどり通信 雌伏篇」
 - 「むくどり通信 雄飛篇」
 - 「むくどりは飛んでゆく」
 - 「むくどりの巣ごもり」
 - 「むくどりとしゃっくん鳥」
 - 「むくどり最終便」がある。
- (朝日文芸文庫から文庫版も出版されていたが現在入手困難)



漢字での「椋鳥通信」では森鷗外の作品にヒット。1909年、文芸誌「スバル」に連載が始まった鷗外による不思議な海外通信。

池澤夏樹は、これを模してコラムの名を「むくどり通信」としたということ。

京都支部会員の方のブログ(樹樹日記)に興味深い記事を見つけた。そこには、①江戸時代に「やかましい田舎者の集団」=「椋鳥」としてバカにする対象であったということ。②「ムクドリ=田舎者」というアイコンを利用し、明治時代の文学者・森鷗外が海外情報を伝える文芸誌の連載コラムを、「日本=世界の中の田舎者」という意味で「椋鳥通信」と命名したということ。③森鷗外の椋鳥通信が「大阪支部のむくどり通信の由来のようです」と紹介されている。

森鷗外のコラム名が「むくどり通信」の由来というのは的外れな想像です。むくどり通信創刊号の表紙には次のように書かれています。「ムクドリが誰もが知り、また親しみのある鳥(農村では害鳥と言われていいますが・・・)であることから名づけられました。本当はハシブトガラス通信にしたかったんですけども・・・」

池澤氏が本会のむくどり通信を知ってか知らずかは不明であるが、我々のほうが十数年早く「むくどり」を名乗ってきたことを皆さんお忘れなく・・・ (HN)

これまでの249号の中で、記念号と銘打って発行されたのは以下の5冊。どれも永年保存版

250号記念特集
むくどり通信
アーカイブス

1992.7 100号 100号記念 ごあいさつ 支部長 藤原廣蔵



ここに、皆様とともにこの100号記念発刊に対しお祝い申し上げます。
昨今、地球環境問題がクローズアップされ、自然保護について国民一人一人の関心ごととなり当会もその先駆者として認識し、その一翼として果たすべき役割も大きくなってきています。
そこで、私たちは自然のシンボルである野鳥に関心のある人達の集団であり、自然の重要性を熟知している者の集まりです。この会では野鳥を媒介として、自然の大切さを世に啓蒙し広める必要があります。それは私たちと同じく自然を大切にし、自然いっぱいの中で鳥を楽しむ仲間を一人でも多く作り底辺を広げる活動、これが自然社会に貢献するものと考えます。
現在の「むくどり通信」読者会員は2千人ですがこれを1万人を目標にしたいと思います。
会員間の連帯感を持つ情報機関とし、また当会の顔としての意義を備えこれから200号、300号と永遠です。「むくどり通信」の充実が会の充実発展そのものです。今後とも「むくどり通信」の発行に皆様のご支援をお願い致します。



100号記念

この号は62頁もの分厚さ。1号から99号までの表紙と主な記事・鳥信のインデックスつき。

2007.3 188号 創立70周年・むくどり通信30周年記念号

70周年記念

多くの人に支えられて70年 支部長 岡本恭治

なかでも藤原前支部長には、永年にわたって支部事務所の提供等、支部財政へのご支援をいただきました。また、岡田康稔氏には、支部における野鳥の観察、研究活動面でのご支援をいただき、さらに、鳥獣保護行政の面で大阪府との良好な関係作りにご尽力いただきました。それだけでなく、お二人には支部活動にとって大切な「人」を育てていただきました。
昭和30年代に戦後の活動を再開して以来今日に至るまで、探鳥会開催を担当してきた「人」、支部報・むくどり通信の編集を担当してきた「人」、南港（住吉浦）を最初として自然保護に努力してきた「人」、そしてこれらの活動を支え、参加してきたすべての「人」、大阪支部はそれらの多くの「人」によって支えられて発展してきたのです。
あらためてすべての「人」に感謝せずにはられません。



この号では、当時の佐々木勇副支部長が「支部70年の歩みをたどる」として、4ページ半にわたり詳細に支部活動の歴史をまとめられています。また、むくどり通信30周年記念「むくどりアーカイブス」として、17編もの過去の記事を再掲、紹介しています。ボリュームはいつもの倍の48頁で、ととて力が入った1冊です。

2007.3 188号 200号記念特集 ワシタカ類、その魅力に迫る !!



- ・スペシャルインタビュー 小海途銀次郎氏に聞く
長年クマタカをはじめとする猛禽類の観察や保護の取組みを行われている小海途さんへのインタビュー。クマタカへの熱い思いがあふれた記事です。大阪府内の猛禽類の状況や共存のための実践例なども参考になります。
- ・2008年1月大阪に舞い降りたケアシノスリ
かつてない大量飛来でフィーバーしたケアシノスリ。その記録をしっかりとまとめようと、記録や写真を集めて、個体識別にも挑戦しました。
- ・ショートエッセイ&観察記 ワシ・タカとの出逢い 7編
真夏のチュウヒ観察記/カラフトワシに会いに/秋のタカ渡り・高槻市萩谷総合公園/モンゴルの猛禽類/タカの渡りと鳥仲間との出会い/ハヤブサ、巣立ちのときに 他



200号記念

2012.11 222号 75周年記念号 大阪の野鳥を見つめ75年

75周年記念

一野鳥を愛した人たちの足跡一

- ・野外識別の草分け、伝説の指導者 榎本佳樹翁 「野鳥便覧」紹介
- ・榎本佳樹さんと大阪支部
- ・少年バードウォッチャーと大阪支部
- ・岡田康稔さんの思い出とオット鳥
- ・南港の野鳥を守る 他
- ・75年のあゆみ 年表

鳥信では和泉市に飛来した7羽のコウノトリを詳しくレポート



2017.8 249号 80周年記念特大号 2大特集

特集1 大阪城公園と南港野鳥園 元山裕康さん&高田博さん
スペシャルインタビュー

・大阪の二大探鳥地をフィールドとする二人に野鳥やフィールドへの思いを語っていただきました。

特集2 忘れられない鳥との出会い in 大阪 10名分の投稿を掲載

そして今号の
250号記念も
永年保存版に！

・釣りブーム、我々がシギ・チドリを観察する場所には必ず多くの釣人がきています。しかし釣人のモラルの低さから、エサ付の釣針を捨てて帰る人が多く、それを食べたシギ・チドリが弱ったり、死んだりしているのをよく見かけます。

南港でもオオメダイチドリが1羽保護されHさんが手当をして泉大津の埋立地に放鳥しました。しばらくは元気な姿を見ることができましたが、このほか、オバシギやダイゼン等も保護され、手当後放鳥されています。

のみ込んだ針や、からだにからまったテグスをはずすのはかなり厄介です。野外に出かける時には、ハサミやナイフを持っていく必要があるようです。

・泉大津の埋立地にもいろいろなシギ・チドリがやってきますが、トウネンが足腰が立たなくなって、餌がとれず弱って死んでいくのをかなり見かけます。エサの影響でしょうか。

ー 当時と比べ最近では、釣り糸にからまったりして弱っているシギ・チドリを見るという機会は本当に少なくなってきています。釣り人のマナーが向上して事故が減ったというよりも、シギ・チドリが激減したために、事故にあう鳥も少なくなったということでしょうか。事故にあう鳥を見かけないことを素直に喜べない複雑な思いがします。

南港に野鳥園が出来た当時は、野鳥園にはシギ・チドリの飛来が少なく、泉大津の埋立地（助松埠頭）が府内最大の水鳥飛来地になっていました。岡本さんに教えてもらって初めて行った助松、その後、どれだけ通ったことか。忘れられない鳥たちとの出会いが多くありました。

僕が野鳥の会に入った昭和38年頃は、書店で目につく鳥の図鑑といえば、小学館や北隆館の子供向けの学習図鑑ぐらいしかなかった。後者にはたしか台湾の鳥や南洋諸島の鳥というページもあって、日本が広がった時代をしのばせる図鑑であった。

そんな時代だったから、鳥の世界に一步ふみこんだばかりの野鳥少年は、近所の本屋でただ一冊見つけた「野鳥」という字の入った本、山谷春潮氏の「野鳥歳時記」をよろこびいさんで買い求め、中味をみてがっくり来はしたものの、なにくそと野鳥俳句づくりに励んだりしていたものであった。

だから、その頃刊行のはじまった中西悟堂氏の「定本野鳥記」は宝物みたいなものであり、本屋のお兄さんが届けてくれる1冊1冊がどれだけ待ち遠しかったか知れない。

また、これもその頃にでた清棲幸保氏の「原色日本野鳥生態図鑑」（保育社）は、当時としてはかなり高価な本ではあったが、父にせがんで買ってもらい、毎日あきもせずにページをくっては、ため息をついていたものであった。何しろ戦前の写真も多く、巢の写真以外はピントも悪く、今の水準とはくらぶべくもなかったが、山野の鳥と水辺の鳥に分かれたあの2冊の写真集にのっていた下村兼史氏や高野伸二氏の新浜の写真は今でもあざやかに思い出すことができる。

だが振りかえって思うと、心ときめかす本があったのではなく、心ときめかす時代があったのだ。

ー 上田恵介さんが野鳥少年の頃に出会った鳥の本の思い出を書かれた文章。「心ときめかす時代があったのだ」のくだりには多くの方が共感するのでは。

先日、大和川でつりをしている四十才前後のオジサンに会いました。その時の会話を書きます。

オジサン、プロミナーを指して、「にいちゃん、それで鳥見てんのか？」

「そうです。」

「鳥の研究してるのんか？」

「いや、ただ趣味で観察しているだけですよ。」

「わい、おとといもきのうも変わった鳥見たんやけどな。

まっ白で、ぶっとい体で首がながーて、バカでかいんや。ちょうど今頃の時間にあっちに向いて飛んで行くんや。」オジサン、少々興奮気味。「今日ももうすぐ飛んで来るでー。」

実はその10分程前、一羽のコブハクチョウが、河口から産廃の方へ向かって飛んで行ったのです。

「ああ、それは白鳥ですね。」と私。

「え！白鳥!？」

「はい。たぶん……」

“たぶんどこから逃げ出した飼鳥でしょう”と言おうと思ったのですが、オジサンの言葉が続きました。

「白鳥かあ……。ほー。白鳥ねえー。わしも色んな鳥見たけど白鳥なんか初めてやなあ。」もう一度しみじみと。

「へー白鳥かあ」

飼鳥だと教えてあげるのはやめました。

「わしも双眼鏡ぐらいほしいなあ。」

つまらないコブハクチョウですが、少しは鳥に興味を持ってもらえたらしく、私もうれしくなりました。スズガモとホシハジロを見せてあげた後、オジサンとは別れました。

その日以来、大和川へは支部の入会案内を持って行くのですが、オジサンにはまだ再会できません。

ー 川岸でのオジサンとにいちゃん（岡林さん）とのやりとりが目に浮かびます。その後、オジサンには会えたのかな？ちょっと気になります。

ー 岡林さんからのメッセージ

「オジサンと白鳥」よく覚えています。

この時私は23歳。40歳前後が「オジサン」ってか。

「兄ちゃん」やん！今、私は58歳... はあ～

日本野鳥の会の月刊誌「野鳥」の6月号が送られてきた。初登場の「俳句を詠もう」欄にわたしの投稿句が掲載されていた。数ヶ月前に初募集されていたので、早速に一句送ったがすっかり忘れていた。

鳩襲う大鷹常に飢えしまま

我ながらまずい句である。しかしこれは実景でうんと感動した場面なのである。

1989年の元旦の夜明けに大阪市鶴見区の鶴見緑地を訪れた。大池には鴨がたくさん群れており、池の前の広場にはドバトが40羽ぐらい地面をつついて餌探しをしていた。

突然鳩の群れが飛び立ちあちらこちらと乱舞しだした。なぜなのか判らない。そのうちにおさまり、また地面をつついている平和な状態に戻った。

突然にまた群れは飛び立ち30メートルぐらいのところで、気が狂ったように取り乱した情景を再現しだした。

そこへ大きな黒い鳥が一直線に飛び込んできた。一羽のドバトがそやつに捕まえられているではないか。大鷹だった。

すこし離れた草地に降り立った。きつい目つき。鋭いくちばしと足の爪、まったく昼の猛禽である。

わたしの近寄る気配を知ると、がっつりと被害者をつかんだまま飛び立ち、山のエリアに去っていった。

一人きりで寒さの厳しいこの朝の格闘劇には真実感動をおぼえた。自然界の厳しさにまざまざとふれたひとときであった。

翌年の4月からここで「花の万博」が半年開催され大好評であった。そのまた翌年の9月からこの緑地は野鳥の会大阪支部の定例探鳥地として、バードウォッチャーに親しまれている。

この地は昔は、ハスの自生する広大な湿地帯で多くのシギ・チドリ、カモが息していたそうで、また言い伝えによると源頼朝が富士の裾野で狩りをしたときに放した金の短冊をつけた千羽のツルが飛来し、そのツルを見物に来る人が多く、鶴見という呼び名ができたとも言われている。(2006.6.10記)

— 定例探鳥地である鶴見緑地の昔の様子や都市に進出しはじめたオオタカの動向がうかがえるエッセーです。

むくどり通信でも「俳句や短歌のコーナー」をつくれば、みなさん投稿してくれるかな？

2008.3 194号 大阪の鳥「モズ」はどうして・いつきまったか 佐々木 勇

「大阪府のモズ」の事は毎日の様に接し、その決まった経緯は投票だったとは聞いていましたが、偶然にも43年前のこの記録綴りを見る機会があり、詳細な経緯がわかり、「モズ」はほんとに府民によって選ばれたんだと親近感が湧いてきました。皆さんにも興味を持って頂けるかと思い、決定の経緯を記しました。

昭和39年に当時の環境庁から環境保護の啓蒙にと、「鳥獣保護及狩猟ニ関スル法律」第1条12に基づいて全国地方自治体に「都道府県の鳥」を選定するように指示がありました。

その話を知った大阪の野鳥好きの有志の間で「キジ」を考えていたようですが、大阪府は狩猟鳥の「キジ」を選定するには無理があると考え、「該当無し」と国へ回答しました。選定しなかったのは全国で熊本県との2ヶ所であり、日本野鳥の会大阪支部、猟友会と一般府民から府への抗議が殺到しました。(読売新聞に「野鳥の会カンカン」の見出しで非難の記事が報じられ、各紙にも同様な記事があり)それではと大阪府農林部水産林務課林政係より再度選定すべく、ホオジロ、トビ、オオヨシキリ、オオルリ、ツバメ、ウグイス、キジ、メジロ、ヒバリ、モズ、アオサギ、<シラサギ>を選び、藤原廣蔵氏(本会支部長)、筒井嘉隆氏(自然科学博物館館長)、猟友会等からなる計15名の鳥獣審議会に選定を委嘱した結果、「オオヨシキリ」「アオサギ」「モズ」3種に絞る答申を受け、昭和40年5月15日に3種を候補とした府民からの「はがき投票」で決めることになりました。

○その時の公示された鳥の説明文

・オオヨシキリ

スズメより大きく、淡褐色の地味な鳥である。水辺のアシ原に住み、アシに止まってけたたましく鳴く。4月頃に渡来し、繁殖し、10月頃は東南アジアに渡り去る。古くから和歌や俳句に「葦切」または「行行子」の名で呼ばれてなじみの深い鳥である。

・アオサギ

府下の野鳥ではもっとも大型の一つで、背は灰青、翼は青黒、腹は白、後頭部に青黒の冠羽があり、頸に青黒の縦斑がある。田園地帯にすみ、以前は沢山いたが、次第に減ってきている。府下では仁徳陵が大集団繁殖地となっている。

・モズ

府下に普通に見られ、初冬に梢上ですどい声で鳴くが、他の鳥の鳴き声をまねする。バツヤやカエルなどを小枝に突き刺し「モズノハヤニエ」を作る習性があるのは有名である。仁徳陵に関係があり、この辺りの地名(現在の堺市百舌鳥町)の起源にもなっている。

この選定に対し、府民から約6000票が投票され、「モズ」2805票、「オオヨシキリ」1390票、と「モズ」が最多で府民が選んだ野鳥の1位になりました。

その結果[大阪府の鳥「モズ」]が1965年(昭和40年)8月25日に当時の佐藤義詮大阪府知事名で公告されました。

現在、大阪府の広報担当副知事「もずやん」が存在するのもこの投票があつてのことですね。

大阪支部のマークとしてモズを使っているのも同様です。



■ 歴代ナンバー1 投稿者・・・ 塩田 猛さん

むくどり通信の歴史を語るときに、忘れてはならない人が塩田猛さん（故人）です。幹事として支部報や通信の編集担当を長く務められ、塩田さんの野鳥識別講座の他、野鳥の識別などに関する記事を数多く投稿され、1995年から2009年まで、ほぼ毎号欠かさず掲載されていました。また、2009年9月に亡くなられてからも生前に投稿いただいていた記事を2011年1月号まで掲載してきました。

塩田さんの野鳥の識別に関する記事は、レベルが高く難しすぎて読まずにパスされていた会員の方も少なくないのではないかと思います。一方、塩田さんの記事を読みたいからと遠方にもかかわらず大阪支部会員になられ「むくどり通信」の読者となってくださった熱烈な「塩田ファン」の方もおられたと聞きます。

改めて、むくどり通信のバックナンバーに目を通し、塩田さんの記事を拾い上げてみました。次ページにまとめたようにむくどり通信だけでも掲載記事は実に96編に及びました。塩田さんの存在の大きさを再認識することになりました。

そのたくさんの記事の中から、これは！？と思った2編を紹介します。

1990.1 85号 塩田猛さん特別寄稿3題のうちの1編

◎キジバトについての新(?)知見

(1) ♂♀の差

中川暁之介さんから教わったのだが、♀の三列風切各羽根の赤褐色の縁どりが、幅広く内外両側にある。♂は、この縁どりが羽根の外側のみ先端部のみにしかない。

(2) 止まる直前のはばたき—ドバトとの差

本種はフワフワとあおぐような感じのはばたきをするが、ドバトはパタパタとはばたく。

(3) 鳴き声

標準的には「デデーポポー」だが、吹田市の自宅付近には「ググゴッゴゴー」[_ _ _ _](ゴッゴゴーが高音)と鳴くのが数羽いる。以前NHKラジオの鳥の番組でも同じ鳴き声を聞いたが、解説者の中坪礼治さんからは別段指摘はなかった。またソ連の鳥のカセットにも亜種が違うためかテンポがスローでずっと濁った声だが、同様の調子の鳴き声が入っている。この変わった鳴き声は個体差なのか、それとも方言なのか。他所にも同様の鳴き方をするキジバトがいるのか、わかれば楽しい。

以上3点、皆さんも観察、確認して下さい。

身近なキジバトでも知らないことが多くあり、しっかり観察すれば新たな発見があるということを教えてくれる記事です。181号2006.1では「デデーポポー」はどこに？と題してさらに詳しい記事が掲載されています。

塩田さんは、ヒドリガモやアメリカヒドリの識別(性別、年齢、エク립ス羽)に関する記事を図解入りで多く書かれています。次号むくどり通信の特集「大阪で見られるカモ・完全ガイド」の中で、改めて紹介したいと思います。お楽しみに・・・

2000.9 149号

野村雪子—私の鳥風景

塩田 猛

私は鳥の外に、いや鳥以上に、歌が好きだ。特に中・高校生時代、次から次へ発売される歌謡曲を、勉強もそこそこに、それこそ熱心におぼえて、級友と教室で歌ったり、ひとりハーモニカを吹いたりしていた。そんな歌の中に、その頃身の回りに普通であった自然の情景が歌われているものが少なからずあり、バードウォッチングを始めた後では、歌詞に鳥が出てくる歌が特になつかしく思われるようになった。そんな歌のひとつに、野村雪子という歌手が歌った、『おばこ船頭さん』というヒット曲があり、その中になつかしく、いとおいしい風景の歌詞がある。

若くして引退した後、30年以上もテレビのなつめ口番組にも全く姿を見せず、消息が気になっていたこの歌手が、4月25日突然、新聞の小さな死亡欄に名前が出て、出勤の電車の中でそれを目にしたとたん、私は思わず「エッ?!」と声を出してしまった。

私が殊の外なつかしく感じるのは次の歌詞である。

こころな こころあたりがチドリの宿か
歌で鱧を漕ぎや 目をさます
風にさやさやヨ 葦の葉ゆれて
流れまかせの 流れまかせの
船が行く

この風景は東北地方の、どこか広大な水郷だろうが、当時(昭和30年ごろ)の大阪にも、規模は小さいが、水郷地帯[と私が勝手に呼んでいる]があった。住之江区北加賀屋町一帯の畑、田、池、水路そして葦原が広がった地域で、木津川左岸河口近くにあった造船所(佐野安、名村、藤永田)の南に広がる水郷で、そこから直線距離で大和川右岸まで約3Km、当時の南港埋立地まで約3.5Kmにわたって湿地が点々とあった。私はこの水郷が大好きで「我がパラダイス」と呼び、トンボ捕り、魚釣りなどによく出かけたものだ。湿地の間を通る野道に座り込み、フナや雷魚を釣っていた前方には水量豊かな水路があり、その両側はよく茂った葦原であった。船こそ通っていなかったが、周辺にはコチドリは数多く生息していたに違いない。私が湿地に魅力を感じ、自然の大切さが身に染みるようになったのは、あの原風景が基になっていると思う。

こんな歌は他にもまだ沢山ある。いつか機会があれば、同じような思いのバードウォッチャーと、自分の持ち歌を、鼻歌でもいいから、お互い披露し合い、鳥談ができれば楽しいだろうなァと思っている。

野村雪子 (1937- 2000)



青森県生まれ、1952年デビュー。1954年「初恋ワルツ」が初ヒット。1955年「おばこマドロス」、1956年「おばこ船頭さん」が大ヒット。1964年引退。
(ウィキペディアより抜粋)

塩田 猛さんの「むくどり通信」掲載記事一覧 (全96編)

No.	発行年月	記事タイトル
48	1983.12	アメリカヒドリ
49	1984	アメリカヒドリ
55	1985.1	高野さん悲し
57	1985.5	識別講座 シギチドリの新しい見方
76	1988.7	大阪城公園のノドグロツグミ
77	1988.9	オオソリハシシギの成鳥はどこへ行ったか?
81	1989.5	トウネン(表紙の絵)
85	1990.1	特別寄稿3編
97	1992.1	泉大津助松埠頭埋立地に飛来したオオチドリのエイジング(年令識別)
98	1992.3	昆陽池に雑種のガン出現
103	1993.1	換羽の基本をおぼえよう(前編)
104	1993.3	換羽の基本をおぼえよう(後編)
105	1993.5	オオヒシクイのこと
106	1993.7	マガモの巻き羽 夏羽と冬羽 — カモはどう?
108	1993.11	レンジャクの仲間の世界で何種?
114	1994.9	ムナグロとアメリカムナグロ
116	1995.3	シメの翼
117	1995.5	Jizzのすすめ
118	1995.7	羽根に親しもう(1)
119	1995.9	羽根に親しもう(2)
120	1995.11	「羽根図鑑」に寄せて
121	1996.1	「羽根図鑑」に寄せて一補遺・訂正
122	1996.3	バフ色とはどんな色
123	1996.5	シギ・チドリは3色セットで
124	1996.7	年齢識別のすすめ
126	1996.11	カルガモの換羽
128	1997.3	バードウォッチャー? パーダー?
129	1997.5	ホントのウソのはなし
130	1997.9	オジロビタキ—亜種の識別
131	1997.9	オジロビタキ幼鳥の翼帯は何色? もっと知りたいオオマシコ
132	1997.11	分布の面白さ大切さ アメリカヒドリ成鳥♀—大雨覆のパターン
134	1998.3	シギ・チドリの後趾 ヤンコウスキーの思い出 ハジロカイツブリとミミカイツブリ冬羽の識別
135	1998.5	表紙の絵 キョウジョシギ コクガンの年齢
136	1998.7	幼鳥の換羽
137	1998.9	オオハッカに見る外国種の分類と和名(の混乱?) I
138	1998.11	オオハッカに見る外国種の分類と和名(の混乱?) II
139	1999.1	コサメ・サメビタキの識別
140	1999.3	箕面市で記録された(98/12)セボシカンムリガラについて 秋のノゴマに思う
146	2000.3	クロガモはかなしからずや
147	2000.5	アオバトの尾羽の数 浜甲子園のクロガモの翼
148	2000.7	オジロビタキ—東/西 クロガモの翼
149	2000.9	野村雪子—私の鳥風景

No.	発行年月	記事タイトル
151	2001.1	表紙の絵 シベリアオオハシシギ
154	2001.7	クビワキンクロは変わりもの(?) ホトトギスは「ホーホケキョ」(?)
155	2001.9	キアシセグロカモメの足は何色?
157	2002.1	岸和田市沖にクロトウゾクカモメ?! 岸和田市のクロトウゾクカモメ(追記)
158	2002.3	コメボソムシクイ—翼式による固定の試み
159	2002.5	幼羽のユリカモメ
160	2002.7	セグロカモメ(複合体)の和名は混迷?
161	2002.9	万博公園のノドアカツグミの年齢と性別
164	2003.3	タカサゴモズはどのようにして来たか
165	2003.5	万博公園の「喉が赤く見えるツグミ」
166	2003.7	「巣の写真」専門家ならOK?
168	2003.11	ハネ ハネ ハ ウイ 羽根・羽・羽・羽衣
169	2004.1	ムギマキの性別と年齢識別
170	2004.3	ホイグリンはへんちくりん?
171	2004.5	—ジジロの真実— 蘇れ幻のオオムシクイ
173	2004.9	オオソリハシシギ—尾の帯は幼いお前のお宝か セイタカシギはなんだか不思議
178	2005.7	アメリカヒドリに首っただけ
180	2005.11	ハクセキレイに挑まれて
181	2006.1	「デデーポーポー」はどこに?
185	2006.9	マミチャジナイって地鳴きじゃない
186	2006.11	塩田猛さんの野鳥講座 1 ああリング切断・・・セグロカモメ複合体
187	2007.1	2 「オジロビタキに「極東形」？」に即答
188	2007.3	3 レンカクや尾羽根の数は別格や
189	2007.5	4 「レンカク船の唄」はエレジー
190	2007.7	5 「属」にぞくぞくしてみませんか
191	2007.9	6-1 よりどりみどりヒドリガモ(羽衣の多様性)前編
192	2007.11	6-2 よりどりみどりヒドリガモ(羽衣の多様性)後編
193	2008.1	7 カラスの換羽は要哉
195	2008.5	8 トポグラフィ ア・ラ・カルト
196	2008.7	8-1 <その1>初列風切
197	2008.9	8-2 <その2>次列風切
198	2008.11	8-3 <その3>三列風切
199	2009.1	8-4 <その4>大雨覆
200	2009.3	8-5 <その5>中雨覆
201	2009.5	8-4 <その6>小雨覆
202	2009.7	8-4 <その7>初列雨覆
203	2009.9	8-4 <その8>小翼羽
205	2010.1	8-4 <その9>肩羽
206	2010.3	9 わかってよかったヨタカの尾
207	2010.5	10 迷鳥の迷想
208	2010.7	11 鳥インフルエンザ・・・マスコミ報道はミスコミ?!
211	2011.1	12 最終回 オオカワラヒワ・・・ 意外と多いかわからないわ

塩田さんの記事は、むくどり通信の他、支部報や本部の「野鳥」誌などへの掲載を加えると180本を超す数となります。今回は支部報掲載の記事は紹介できませんでしたが、支部報79号の「ウミネコは何年で成鳥になるか」は、ウミネコが4年で成鳥となることを初めて明らかにした貴重な記事で、一読の価値があります。

■〇〇さんを偲んで

250号、40年の歴史の中で、〇〇さんを偲んでという記事が何度か掲載されています。支部幹事や古くからの会員の方が亡くなられた際に追悼のために、寄稿されたいくつかの記事を紹介し、故人の功績とをあわせて振り返ってみたいと思います。

1990.5 87号 酒井 健さんを偲んで

上田恵介さん（当時大阪支部幹事、現日本野鳥の会副会長）が酒井健さんの南港の野鳥を守る活動への功績や交流の思い出を3ページにわたり書かれています。

（・・・は文章を省略した箇所。長文につき一部しか紹介できない点、ご了解ください。）

・・・現在の南港野鳥園を知っている人はいても、それをつくるのに大阪支部のメンバーが南港の野鳥を守る会を結成し、署名運動をして、大阪市に請願し、その中で建設が決まったという経緯を知っている人も少なくなかった。だが大阪の自然保護、野鳥保護のことを語るとき、南港の野鳥を守る会とその運動の中心にいた酒井健さんを抜きには語ることはできない。

酒井さんが自然保護運動に関わったのも、私が酒井さんと出会ったのも南港の野鳥を守る会だった。ちょうど21年前の5月、私たちは粗末なザラ紙で署名簿をつくり、大阪駅前や箕面、天王寺などで道行く人たちに声をからして、南港に野鳥園をと、大阪市への陳情署名を訴えていた。こうして集めた8300名の署名を大阪市議会へ持ち込んだのである。私たちの陳情は7月の大阪市議会で趣旨採択となり、その2年後、当時の中馬市長が野鳥園設置を選挙公約にかかげて再選され、野鳥園の建設が決まった。

当時、私達「守る会」のメンバーは毎週金曜日に箕面市瀬川の新婚まもない酒井夫妻の新居に集まって会合をもっていた。仕事を終え、また大学の講義が過ぎて夕方、会員たちは三々五々と集まっては、封筒のあて名書きや会の資金源であるオリジナル絵葉書の袋詰めをし、運動の方向を議論し、南港の状況や鳥の出現情報を交換しあったりしていた。守る会の活動メンバーが忙しい仕事や勉学の最中に、集まって、運動を続けてこられたのも、酒井家のある気楽なふんいきがあったればこそであった。当時、寮や下宿で貧乏生活をしてたわれわれ学生はよく夕食をよばれたものであった。まさに2人の新婚生活は南港の野鳥を守る活動そのものだった。・・・

いま振り返ってみると、南港の野鳥を守る会、そして酒井宅は私たちにとって「自然保護の学校」であった。その学校の校長が健さんだった。

翌1970年は全国的に公害反対運動が盛り上がり、エコロジーブームが起き、全国各地に自然保護の住民運動が沸き起こった年であった。この年の6月、酒井健さんを会長に、関西初の自然保護のための連合団体“関西自然を守る会（のちの「自然を返せ！関西市民連合）”が発足した。・・・

さらに守る会では淀川の自然を守るために淀川の自然を守る会を発足させて、淀川の自然保護にも取り組んだ。もちろん酒井さんも、筒井先生や高田直俊さんなどとともにその運動の先頭に立った。・・・「大阪自然環境保

全協会」を設立、その副会長として、実際の活動の先頭に立ったのも酒井健さんであった。また長く府の自然環境審議会の委員をつとめられ、府の自然保護行政を大きく前へ進める役割を果たされた。大阪において自然保護、野鳥保護の運動が、大きく成長できたのは、酒井健さんの存在を抜きにしては考えられない。健さんのあのバイタリティがなければ、つい楽をしてしまいたいわれわれ日和見主義者は運動など続けられなかったかもしれない。

・・・

健さんの短い一生は波乱にとんだものだった。その生き方を見ていると、高杉晋作の辞世の句「面白きこともなき世を面白く」が浮かぶ。私は天国を信じないが、その存在を信じて逝った健さんは、天国でも何か「面白い」ことをやっているのかもしれない。

上田恵介さんが「自然保護の学校」の校長と称した酒井健さん。南港の野鳥を守る活動から淀川の自然を守る会、さらに大阪自然環境保全協会の発足にとつながる大きな流れの中心にいたのが酒井さんでした。その大阪自然環境保全協会も、今年創設40周年を迎えます。

2002.9 161号 鈴木宏介さんを悼む

岡本恭治さん（当時支部長）が鈴木さんとの思い出等を書かれています。

・・・鈴木さんは、鳥や獣についてはもちろんのこと、お好きだった溪流の釣りの話になると夢中になる方でした。山女釣りをしていて、なぜかカワガラスを釣ってしまったときのことを、身振り手振りを交えて面白おかしく話をされると、鈴木節を聞くために人が集まり、笑いが溢れていました。・・・大阪支部には昭和47年に入会されました。会員がまだ400名足らずの時点で、ようやく探鳥会や支部報の発行などの活動が軌道に乗りつつある頃でした。そして昭和49年から幹事として、支部の活動を今日まで支えてきてくださいました。・・・また、岡田康稔さんの後を継がれて大阪府の鳥獣専門員になりました。大阪府と大阪支部が、自然保護についてお互いに協力しあえる体制ができたのも、岡田さんとその後を継がれた鈴木さんのお力によるものと思っています。

・・・鈴木さんはお酒がお好きでした。その雰囲気を楽しんでおられるようでした。よくご一緒させていただきましたが、楽しい、そしていいお酒でした。愛用のパイプをくわえ、静かにお酒を楽しんでおられるお姿、鈴木さんには一番お似合いであったように思います。

鈴木さん、いいお店を探しておいてくださいよ。ご冥福を心からお祈りいたします。

岡本さんの追悼文の中にある「カワガラスを釣った」という話は、むくどり通信1981年5月33号に鈴木さんが投稿されています。

鈴木さんと言えば、パイプの煙・・・今では考えられませんが、府の鳥獣専門員として勤務中も、パイプをくわえ、煙をふかされていたのが思い出されます。



2003.11 168号 八木敬理さんを偲んで

当時、現役幹事（探鳥会部長）の急逝ということで、この号のむくどり通信は八木さんの追悼特集となりました。多くの追悼文の中から橋本正弘さん(当時保護部長で現副支部長)の文章(一部)を紹介します。

7月24日朝、佐々木副支部長より電話があり、八木さんが昨日逝去されたとの連絡をいただき思わず「えっ…」と驚きの声をあげてしまいました。……………

八木さんとは共に行動し語り尽くせない思い出があります。淀川定例探鳥会、バードソン、バスツアー、大阪自然史博物館での野鳥展、淀川野鳥マップづくり、鳥と緑の情報センター設立時のチョウの調査、八木さんと日本野鳥の会本部評議員会に出席したりしながら野鳥、昆虫、映画、音楽、植物などについて話し合ったりしてずいぶん楽しい時を過ごしたものだと思ひ出しています。八木さんは威張ったり、傲慢になつたりすることなく、私だけでなく多くの会員から愛されていました。

……………

八木さんは私の心の中に生きています。また多くの会員の心の中にも生きてると信じています。八木さん！ありがとう。支部のために長年ご苦労様でした。……………

八木敬理さんの功績

- ・定例探鳥会の増設 探鳥会部長在任中に定例探鳥会の開催地を7ヶ所から21ヶ所に増やしたこと
- ・室内野鳥教室・展示会の開催
- ・バスツアー探鳥会の企画・実施
- ・2002年、野生動物保護の功績から鳥類保護連盟より表彰授与。

1986.11 66号 '86 バードソン始末記

大阪チーム 佐々木、八木、納家、石川

8月6日の幹事会で4人のメンバーは結成された。24時間に何種の鳥を観られるかを競うだけのものかと考えていたが、どっこい違う。寄付スポンサーを募る競技である。1ヶ月の間にコース設定、下見、スポンサー依頼、マスコミ PR と企業・個人スポンサーを見つけねばならない。……………略……………

- 1986年9月5～6日 日本野鳥の会 第1回バードソン「大阪サントリー」チーム 総合優勝
- 全国でタンチョウ保護の募金が800万円集まりました
- 24時間で観察した野鳥 74種 (全国6位)
- 協賛企業数 10社 (全国1位) ■募金額 (全国1位)
- 個人サポーター400余名 (全国1位)
- 1種あたりの募金額は1万円を突破。
- ルート 9/5 21:00 千里スタート 一妙見山 9/6 夜明一箕面 一安威川一万博一浜甲子園一南港一堺一久米田池一男里川

日本で初めて開催されたバードソン。サントリーをメインスポンサーに「SAVE THE BIRDS」を合言葉に、そろいのTシャツを着て24時間、370kmを走破しての鳥見レース。企業スポンサーの多くは佐々木さんの営業力の賜物。たくさんの皆さんのサポートを得て、見事優勝の栄誉に輝くことができました。今は亡き八木さんと佐々木さんとの忘れられない思い出です。(納家)

2008.9 198号 佐々木勇さんを偲ぶ

2008年、副支部長を退任され顧問となって間もない6月に急逝されたことから、この号のむくどり通信は追悼特集となりました。17もの追悼文の中から村濱史郎さん(現副支部長)の文章(一部)を紹介します。

……………佐々木さんとの付き合いは、私が大阪支部幹事になりたての頃に遡るから、20年以上になるだろうかとにかく行動力・バイタリティに溢れる人だった。私が支部幹事を退いて10年以上経つのににもかかわらず支部や、大阪府とのつながりが保てているのは佐々木さんからの、「村濱さあん、忙しいとこ悪いんやけんどもちょっとたのまれてえな」との電話からだだし、大阪府が今年3月に発行した「大阪府油等流出事故時野生鳥獣救護要領」の作成に携わることとなったのも佐々木さんからの依頼によるものだった。

あまり話題になっていないように思われるが、全国の自治体の範ともなるべきこの「要領」の作成こそ、佐々木さんなくてはあり得なかった事業だった。作成委員会の人選から参加交渉、委員会会場設営・開催、関連イベントの開催等々、まさに八面六臂の大活躍だった。佐々木さんの人脈の広さと、実行力をあらためて思い知らされた1年半だった。……………最後に会ったときに話したのは、野鳥救護活動の今後についてだった。佐々木さんの想いと私の想いが一致し、「よっしゃ。ほんならいっちゃよろか」と二人で盛り上がったものだった。

あまりに突然の出来事だけに、まだ信じられない。「村濱さあん、この間言うとった NPO 設立の件やけんどなあ」ふいと、佐々木さんから電話が掛かってきそうな気がいまだにしている。……………

佐々木勇さんの功績 (多すぎて書ききれません…)

- ・探鳥会部長、総務部長、副支部長を歴任、鈴木宏介さんの後任として大阪府鳥獣専門員をつとめ、支部と府のパイプ役として府の鳥獣保護行政や支部の発展に寄与。
- ・南港ボランティア委員会を組織し事務局として活躍

コメント

佐々木：鳥探しは応援者と3人におまかせ。口だけは元気でした。……………

八木：終わったあとのコーヒーがおいしかった。こんな充実した1日は、ここ数年無かった。来年もと言われたらしんどいなあ。

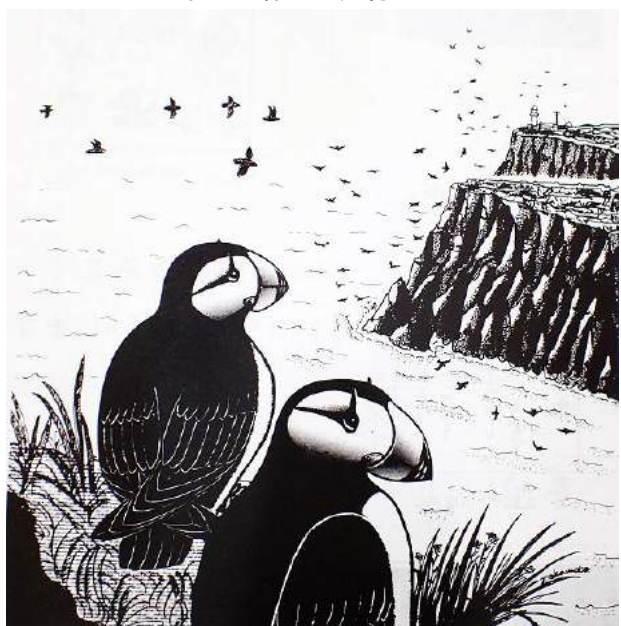
(納家、石川のコメントは紙面の都合で省略)



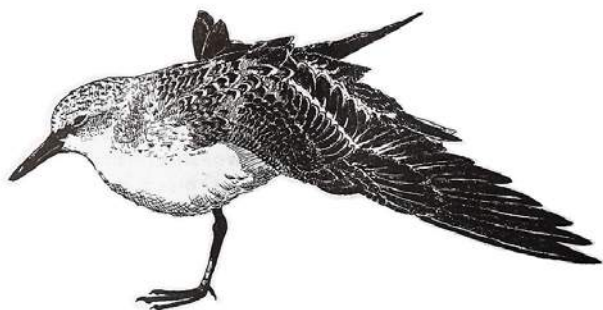
「大阪サントリー」チーム (左から納家、八木、石川、佐々木)



1986.5 63号 増田 友規子さん



1989.3 80号 ツノメドリ 岡本 俊晴さん



1989.5 81号 トウネン（幼鳥） 塩田 猛さん

「トウネンは普通のシギのためか、シギ・チ狂にもあまり注目されていないようだ。でも、主繁殖地はユーラシア大陸の東端で、世界的には分布が狭く、珍しい鳥と言える。春秋とも飛来数の多い日本は、最適の観察地であり、また、ヨーロッパトウネンなど近似種を識別するには、トウネンを熟知することが不可欠で、トウネンぬきには、シギ・チドリは語れないと思うのだが…」と、シギチをこよなく愛した塩田さんならではのコメントが付されている。

■ 表紙の絵にも注目

現在、むくどり通信の表紙は会員の皆さんの写真で構成していますが、昔は味のあるイラストを多く使っていました。

これまでに表紙を飾ったイラストは、160点、そのうち印象に残る作品を選んで紹介します。



2002.3 158号 コアホウドリ 浅井 潤治さん



2003.9 167号 ホシムクドリ 伊藤 玲子さん

現在のむくどり通信の鳥信コーナーの前身が、「大阪のとりに」でした。当時はインターネットもなく、鳥の記録は野鳥記録カード(葉書形式)で郵送してもらってました。大阪の野鳥の記録を蓄積し、「鳥類目録」作成時の基礎データとして活用できるようにすることが、大きな目的でした。府内で初記録となる鳥や記録の少ない珍鳥、また識別が難しい種などについては、詳細な観察記録や第三者が客観的に判断できる写真などを元に正式記録として認めるか、採用保留とするかなどを記録委員で協議して決定してました。

以下は、府内で初めて記録され正式記録として採用された「コキアシシギ」についてのレポートです。

1995年当時の記録委員は、小山慎司さん、白木信生さん、林育造さん、森山春樹さん、そして私(納家)でした。当時のむくどり通信には、「変わった鳥を見つけたら、至急お近くの記録委員まで連絡下さい」として、各委員の居住市町、電話番号を記載してました。携帯電話もまだ普及しておらず、インターネットもない時代、鳥の情報のやりとりも長閑で懐かしい感じがしますね。それにつけても、マイフィールドでのコキアシシギとの出会いは今も忘れられない大切な思い出です。

大阪の鳥 No.316 コキアシシギ

1995年9月22日14時00分より同55分にかけて、泉大津市助松埠頭埋立地の淡水湿地で見慣れない中型のシギを1羽観察した。双眼鏡で確認した時は背面の茶に白の斑点の特徴からタカブシギと思われたが、足が長く、体つきがスマートであり、体のシルエットはタカブシギとはかなり異なった印象であった。足の色ははっきりした黄色で、岸辺の水の中を歩きながら、時々細長い嘴でヒョヒョヒと、水面をつつくようにして採餌していた。体の大きさは近くにいたキリアイよりもひと回り以上大きく、タカブシギよりも明らかに大きいと思えた。顔つきはタカブシギによく似ているが眉斑は目先でとまりタカブシギのように目の後ろまで達していなかった(この点はフィールドガイド日本の野鳥の図版と異なる点であった)。また、胸には細かい縦斑が並び、腹部の白色との境が比較的明瞭であった。飛翔時には、タカブシギ同様に白い上尾筒が目立った。鳴き声はピューと聞こえた。また、最後に飛び立った時には、ピュピュピュピュとタカブシギによく似た声で連続的に鳴きながら飛び去った。約1時間の観察中、タカブシギやイソシギのようにお尻を上下にゆする行動は見られなかった。

ブラインドからの観察であったため、時に警戒することもなく10メートル前後まで近づいてきたので、間近で撮影することができた。後日、写真を見ながら細部を検討した結果(記録委員会)、大阪府初記録のコキアシシギ(幼鳥)であるとの結論に至った。

本種は北アメリカ北部で繁殖し、中央・南アメリカで越冬するシギで、日本ははるかコースを離れているため、日本ではこれまで数例しか記録されていない。

1995年の秋の助松は最後に残ったわずかな湿地(約2ha)に例年同様トウネンやハマシギ、そしてキリアイやツバメチドリなどが少数飛来し、間近に観察できた。しかし整地工事の進行に伴い9月末には周囲のヨシ原が刈り倒され、10月初めには水がすっかり抜かれてしまった。

約15年にわたって通い続けた助松埠頭の最後の秋を惜むようなコキアシシギとの出会いであった。今は、事業の遅れている野鳥園が早く実現するようお願いしたい。(観察・記録:納家 仁)



コキアシシギ 1995.9.22 泉大津市助松埠頭埋立地 撮影:納家 仁 ※モノクロをカラーに、右写真も追加掲載

—助松埠頭のその後 野鳥園はいつできる—

「泉大津に野鳥園をつくらう会」と日本野鳥の会大阪支部が共同で野鳥園設置の署名活動に取り組み、1987年3月に、埋め立て地に予定されている緑地公園(7ha)を野鳥園として計画してもらえるように大阪府知事、泉大津市長に要望署名(11,000余名分)を提出、泉北6区先端緑地内に「野鳥が憩える公園」の整備方針が決まった。

その後、2003年から2006年にかけて人工干潟が造成され、再び、シギ・チドリ類が飛来するようになってきた。

干潟は約2haと小規模であることから大型種の記録は少ないが、小型種、特にトウネンが春期に多く記録されるなど、大阪湾での重要なシギ・チドリ渡来地のひとつとなっている。

人工干潟は造成されたものの、公園整備の予算が確保できない状況が続いており、公園全体が完成し一般公開され

る目途は立っていない。現在は、年に一度、大阪府港湾局とのワークショップという形で意見交換と現地での観察会を継続しているところである。

野鳥園をつくらうと、先頭に立って岸知事(当時)にお願いに行った代表の酒井静夫さん(故人)に、野鳥園オープンの報告ができるのはいつの日になるのだろうか。



泉北6区先端緑地人工干潟(通称、助松野鳥園)全景 ※現在、一般の立入は禁止となっている (納家2017.10記)

「むくどり通信」バックナンバーを頒布しています ★印は編集長おすすめ度

一部 200 円、送料 100 円 (※5 冊まで送料 100 円です)。

[郵便番号][ご住所][お名前][電話番号][希望する号][冊数]を明記し支部事務所あてメール又はファクス送信してください。【FAX : 06-6766-0056 (2017 年 12 月まで)】
【メール : wbsj-osaka@sun.gmob.jp】 ⇒ 【FAX : 06-6766-0501 (2018 年 1 月~)】

折り返し、ご希望のバックナンバーを送付いたします。在庫のない号もあります。料金は同封の郵便振替用紙を利用して、お支払いください。

例① 2010 年 9 月号、11 月を各 1 部希望の場合 200 円×2 冊+送料 100 円=500 円

例② 合計 6 冊を希望の場合 200 円×6 冊+送料 100 円+分送分 100 円=1400 円

205 号 (2010. 1)
これからの野鳥写真/
デジスコの世界



206 号 (2010. 3)
淀川の自然/塩田猛
さんを偲んで



207 号 (2010. 5)
傷病鳥の救護と野生
復帰



208 号 (2010. 7)
金剛山の自然と野鳥



209 号 (2010. 9)
生物多様性の保全/堺第
7-3 区のチュウヒの保護



210 号 (2010. 11)
大阪のカモメ



211 号 (2011. 1)
私のフィールドノート



212 号 (2011. 3)
探鳥会をもっと楽しもう



213 号 (2011. 5)
鳴き声マイスターになろう



214 号 (2011. 7)
暑~い夏こそシギ・チ
ドリ



215 号 (2011. 9)
レッドデータブックの
鳥たちの今



216 号 (2011. 11)
野鳥の愛玩飼養と密
猟問題



217 号 (2012. 1)
2012 年 私の見たい鳥



218 号 (2012. 3)
増えた鳥、減った鳥



219 号 (2012. 5)
ご近所バードウォッチ
ングのすすめ



220 号 (2012. 7)
ため池と野鳥



221 号 (2012. 9)
鳥たちの旅を追って



222 号 (2012. 11)
75 周年記念号
大阪の野鳥を見つめ 75 年



223 号 (2013. 1)
日本鳥類目録改訂第 7 版
—その内容とこれからの
対策



224 号 (2013. 3)
日本鳥類目録改訂第 7 版—
セグロカモメ対策—
都市公園の野鳥



225 号 (2013. 5)
the big year OSAKA
2012 —全記録—



<p>226号 (2013.7) 守ろう!大阪南港野鳥園</p> 	<p>227号 (2013.9) 鳥たちの食べ物</p> 	<p>228号 (2013.11) 野鳥の楽しみ方 あれこれ</p> 	<p>229号 (2014.1) 鳥の数をカウントしよう ・観察ポイント ミゾゴイの採餌行動 ・鳥信イイジマムシクイ</p> 	<p>230号 (2014.3) 海鳥との出会いのために ・鳥信 イスカの記録</p> 
<p>231号 (2014.5) 野鳥救護の現場から</p> 	<p>232号 (2014.7) 動物園でバードウォッチング ・鳥信 コシャクシギ他</p> 	<p>233号 (2014.9) タカの渡りを楽しもう</p> 	<p>234号 (2014.11) 野鳥図鑑活用法 ・鳥信 ヒメウズラシギ ツバメチドリ他</p> 	<p>235号 (2015.1) オオタカ 希少種指定解除の動きと課題</p> 
<p>236号 (2015.3) 里山の自然と野鳥 ・淀川水無瀬コミミズク ・鳥信 ヒシクイ越冬、 ピロードキンクロ、ク ロガモ他</p> 	<p>237号 (2015.5) 近畿はひとつ つなげよ う野鳥保護の輪 ・近畿の野鳥ホットス ポット ・鳥信 カラムクドリ、 ベニヒワ、コウノトリ他</p> 	<p>238号 (2015.7) 夏だ!海だ!アジサシだ! ・鳥信 ヘラサギ、 ブッポウソウ他</p> 	<p>239号 (2015.9) 死ぬまでバードウォッチ ング ・鳥信 コグンカンドリ ヤイロチョウ他</p> 	<p>240号 (2015.11) 鳥の絵を楽しもう ワイルドライフアートの 世界 ・鳥信 ヒシクイ、 ムラサキサギ他</p> 
<p>241号 (2016.1) 庭に野鳥を 一自宅で楽し むバードウォッチングー ・鳥信 ミミカイツブリ ウタツグミ他</p> 	<p>242号 (2016.3) 愛しのフクロウ ・鳥信 カラアカハラ他</p> 	<p>243号 (2016.5) 初めての鳥見旅 一忘れ られない鳥との出会いー ・鳥信 アカアシカツオ ドリ他</p> 	<p>244号 (2016.8) 鳥たちのねぐらを追う ・観察ポイント 泉大津に飛 来したヘラシギ 鳥信バライロムクドリ</p> 	<p>245号 (2016.11) 私の鳥の巣コレクション ・観察ポイント コグンカ ンドリ亜成鳥の記録 ・鳥信 オニアジサシ</p> 
<p>246号 (2017.1) 冬に会いたい猛禽類 ・鳥信 カラフトムシクイ 府内初記録</p> 	<p>247号 (2017.3) 春の河口でシギ・チドリ 大津川河口/男里川河口 ・鳥信 オジロワシ他 ・コシジロウミツバメ</p> 	<p>248号 (2017.5) 大阪のサシバの今</p> 	<p>249号 (2017.8) 80周年記念特集 元山裕康氏・高田博氏対談 /忘れられない鳥との出会い</p> 	<p>250号 (2017.11)</p> 
				

これからの「むくどり通信」

今回 250 号記念特集の企画・むくどり通信アーカイブということで改めて過去の会報に目を通して感じたことは以下の3点です。

- ・塩田猛さんなど、多くの方が記事を投稿されていること
- ・昆虫や植物など自然に関する連載記事が多くあったこと
- ・会員が描いた絵で表紙を飾り、また文中にも多くの挿絵が使われていること

一方、現在のむくどり通信は、カラー化などによりビジュアルにはなっていますが、記事の中味はどうでしょうか？文字が多すぎて読みづらい。紙面のデザインがセンスないなどの声もよく聞かれます。

●むくどり通信を一緒に作りませんか？

編集担当スタッフが和気あいあいと集まって、誌面を一緒に作りあげていくという編集スタイルとは異なり、編集担当が深夜、黙々と PC に向かって原稿の作成や割付をしているのが状況です（特別な編集ソフトはなくワードを活用）。

私は 2009 年から編集に携わり早や 8 年、199 号から今回節目の 250 号までの編集にあたってきました。

この間、毎号特集記事の企画を検討し、多くの方に執筆やインタビューへの協力をいただきました。また、カラー化の実現を進める中で印刷工程の見直しなどで発行にかかる経費を大きく縮減してきました。

こうした中、支部のホームページが飛躍的に充実し、新しい情報発信を担うようになったことから、今後、むくどり通信に期待される役割も変わってくるのではないかと思っています。とはいえ、むくどり通信は大切な「支部の顔」です。

●新しい体制で、新しいむくどり通信を！

編集担当のスタッフを大募集します。もちろん編集の作業だけでなく、企画にも関わっていただくことも可能です。

ほしい人材は、何かしらの編集を経験したことのある方、紙面のレイアウトやデザインの経験者やセンスのある方、ワードやエクセルなどが使える方、かわいいイラストの描ける方、文章を書いたり読むことが好きな方、その他フットワークよく取材などに出かけられる方などです。もちろん全く経験がなくてもやってみようというチャレンジ精神のある方も大歓迎です。

なお、校正などのやりとりにはメールを活用しますので、インターネットが使えることが条件となります。

むくどり通信の作成にかかわってみたいという方は、まず、下記の広報 G までメールでご連絡ください。

支部広報 G メール mukudori-osaka@sun.gmob.jp

●編集担当になってイイコト

- ・知らなかったワードの裏ワザなどを教えてもらえる
- ・印刷物になるより早く鳥情報を知ることができる（インターネット情報がはるかに早いけれど・・・）
- ・年に 5 回も大きな達成感！が得られること

バードウォッチングで大切なことは、

この趣味がもっと広まることです。

大人も子供も鳥を見るのが面白く、楽しいと思う人が増えることです。最初は鳥を見て名前が分るだけでいいと思います。とにかく、鳥に興味や関心を持つ人、バードウォッチングが面白くて楽しいと感じる人が増えることが大事です。このために、各地で多くのボランティアが探鳥会を行っているわけです。鳥に興味を持つようになった人は、鳥を守りたく思うでしょうし、その生息環境をいつまでも保全したくなるのは、ごく自然の成り行きです。

その結果は、鳥だけでなく、他の生きもの、そして目先的には気が付かなくても、結局はヒトにも有益となります。

バードウォッチングを広めるためには、いろいろな形の情報発信が必要です。自分が知り得たこと、知りたいこと、分からないこと、疑問に思うこと、気付いたこと等々を最大限公表することが大切です。

バードウォッチングは自分ひとりの宝物や秘密のように取り込んでしまうような趣味ではありません。例えば、バードウォッチングの歴史が長いイギリスでは、国中のバードウォッチャーが雑誌や機関誌に発表した多くの観察記録を基にして大巻の図鑑が出版されています。今から 70 年も前のことです。

また日本野鳥の会の会員数は数万人ですが、人口が半分以下のイギリスでは鳥類保護協会の会員は 100 万人を優に超えています。社会での存在感や発言力の強さは押して知るべしです。

現今、情報の交換や取得は、国内外を問わず、インターネットで容易にできます。ただ外国との交信には、少なくとも英語の読み書きがあまり苦勞なく出来ることが、求められます。鳥の本や図鑑や雑誌は外国語で書かれたものが多く、しかも、内容の優れたものが少なく、これらを活用するためにも、英語力の鍛錬は鳥を知るための強力な道具になることでしょう。

以上は 塩田猛さんの手記

「バードウォッチングの本質と大切なこと」（2006. 8. 30）からの抜粋です。

むくどり通信 206 号（2010 年 3 月）の特集「塩田猛さんを偲んで」の中で紹介したものを再掲しました。

皆さんも塩田さんにならい、野鳥観察を通じて発見したことなどをどんどん文章にして公表しましょう。印刷物に自分の観察記録が載り、多くの方に読んでもらえるのは率直にうれしいことです。

野鳥観察は奥深く、まだまだ分からないことだらけです。私たちアマチュア愛鳥家の観察の蓄積が、鳥の生態の解明や保護につながることにあります。

皆さんからの観察レポートや鳥の記録の投稿が増え、より盛りだくさんの鳥情報を発信できるようになればと思っています。

皆さんからの投稿を心よりお待ちしております。



大阪市立自然史博物館のポーチにぶら下がるクジラでは、ここ数年スズメが営巣しています。スズメの繁殖期といえば、春から夏というのが相場。確かに春から夏には、巣をめぐってケンカをしたり、巣材や餌を運びと、巣の周辺で盛り上がっています。でも、秋から冬にもスズメは巣の周りのウロウロしています。巣をめぐってケンカをしているようでもあります。何が起きているのか気になります。そこで今回は、スズメの繁殖期に注目してみます。テーマは、秋から冬にスズメは巣でなにをしているかです。

●繁殖期とは？

まず繁殖期とはいつからいつまでかを確認しておきましょう。『鳥類学辞典』によると、繁殖期とは「動物が、交尾、造巣、産卵、卵や子の世話をする時期」だそうです。繁殖につながる巣をつくったり、巣場所を確保しているなら、それは繁殖期と呼んでも良さそうです。

『アニマ 1981年10月号』は「秋、鳥に何が起きているか」特集で、秋につがいを形成するカワラヒワ、春のために秋にさえずるホオジロといった興味深い話題が並びます。その内の一つ、中村・川那部(1981)の対談の中には、「繁殖期は秋に始まる」というフレーズが出てきます。その根拠として、エナガが秋に巣をつくり始めることがあると述べています。繁殖につながる巣をつくるのなら、確かに繁殖期は秋に始まっているのかもしれませんが。

●秋から冬のスズメの巣

それでは、スズメの場合はどうでしょう？

中村・中村(1995)にはこんな記述があります。「番の形成は3～4月に盛んで、早いものは前年の9月頃に始める。雄は巣穴の周りだけを防衛し、その近くで雌をよぶ」。

Cramp & Perrins(1994)には、あくまでもヨーロッパのスズメの話ではありますが、スズメのつがい関係は基本的には生涯続く。つがいの中には秋に巣をつくるものがある。といった記述があります。

三上・三上(2015)は、秋から冬の間、スズメは巣の周辺でおもに活動している例を示した上で、巣をねぐらに使っていたことを報告しています。そして、秋から冬にも巣場所を確保し続け、それが次の繁殖を有利に進める事につながる可能性に言及しています。

総合すると、秋から冬もスズメは巣場所を確保し、つがい形成の場やねぐらに使いつつ、時には巣づくりまでするようです。秋から冬、巣の周りがスズメにぎやかなのうなづけます。

●野外で実際に観察してみよう

スズメが秋に巣づくりまでするのなら、スズメの繁殖期は秋に始まると言っても良さそうです。ただ、秋の巣づくりがどの程度みられるのか(つまり秋に繁殖期が始まる個体はどのくらいいるのか)、どんな個体が秋に巣をつくるのか、秋から巣を確保しておけば繁殖成功が高まるのか、などなど謎がいっぱいです。

結局のところ、秋から冬にスズメが何をしているのかは、あまり調べられていません。もしかしたら、すでに巣場所を巡る戦いは春までに終わっているのかも。なにか面白い発見が残されているかもしれません。

スズメの巣は、家の周りに普通にみられるでしょう。秋から冬、スズメたちがその周りで何をしているのか、少し注意して観察してみてもはどうでしょう。



図1：巣に出入りするスズメ 錦織公園(上村 賢)

●引用文献

中村登流・川那部浩哉(1981)対談 鳥たちの一年は秋に始まる. アニマ(103): 25-29.

中村登流・中村雅彦(1995)原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>. 保育社, 大阪.

三上かつら・三上 修(2015)冬期におけるスズメの住宅地利用と営巣場所への執着. 日本鳥学会誌 64(2): 227-236.

山岸 哲・森岡弘之・樋口広芳(監修)(2004)鳥類学辞典. 昭和堂, 京都.

Cramp, S. & C.M. Perrins(ed)(1994) Handbook of the Birds of Europe the Middle East and North Africa Volume VIII Crows to Finches. Oxford University Press, Oxford.

和田 岳(わだ たけし): 本会幹事、大阪市立自然史博物館学芸員。HP「和田の鳥小屋」

<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/wada/wada-index.html>

『バードコールをつくろう!』教室

8/20 天王寺図書館

一昨年、昨年は『小鳥の描き方教室』を開催しましたが、今年には日本野鳥の会大阪支部会員で、子ども造形教室「アトリエかめさん」を主宰されている安井奈穂子さんに講師をお願いして、「バードコールをつくる」ことに挑戦してもらうことにしました。

当日までの参加申し込みは子供5名、大人2名の計7名でしたが、開始直前に体調不良で、子供2名がキャンセルされました。しかし、図書館に来館中の方々にも呼びかけた結果、子供2名と大人1名の3名の方が参加してくれることになり、最終的には子供5名（小5生1、小3生3、小1生1）と大人3名の計5名の方がバードコード作りに挑戦して下さいました。

安井先生の懇切丁寧なご説明で、最大の難関である電動ドリルを使っての木材への穴あけも順調に突破。最後に各自思い思いの鳥の絵を描いて全員時間内に完成させることが出来ました。

このバードコールで今年の秋～冬にかけて野鳥との素晴らしい出会いがあることでしょう。（企画G）



～「バードコールをつくろう」に参加して～
初めて行く図書館で、鳥の羽根がたくさん展示してあったので、「スゴいなあ～」と思いました。バードコールを作るのに一番難しかったのは、ひもを三つ編みにするところです。ほくは初めてだったので、時間がかかって大変でしたが、途中から上手にできるようになって良かったです。電動ドリルを使って穴を開けるのは、ドキドキしました。何とか上手にできたので、うれしかったです。いい音も出て良かったです。これを使って、どんな鳥がやって来るのか、とても楽しみです。色々教えていただき、ありがとうございました。
大久保 凱人(かいと)くん (小5)

会員専用ホームページの開設について（お知らせ）

- 1 会員の特典を増やし会員拡大を図るために、大阪支部の会員のみが閲覧できる「会員専用ページ」を開設しました。
- 2 会員専用ページを閲覧するためには「ユーザー名」と「パスワード」が必要となります。
- 3 「ユーザー名」と「パスワード」は「むくどり通信」に掲載し、「むくどり通信」の発行の時期に合わせて定期的に変更します。
- 4 会員専用ページにアクセスすると下記のような画面が出てきますので、「ユーザー名」と「パスワード」を入力すると目的のページが閲覧できます。



今回のユーザー名とパスワード

ユーザー名 : kinkurohajiro
パスワード : ys11ky22

今回設置した会員専用ページは下記の通りですが、更に充実を図るため「こんなページが欲しい」、「このページも会員専用ページにせよ」等のご意見をお寄せください。可能な限り検討させていただきます。

- ① 野鳥図鑑
- ② 探鳥会記録（定例探鳥会・その他探鳥会の出現鳥記録）
- ③ 「むくどり通信」バックナンバー（2010年以降）の閲覧

■「今月の鳥」写真大募集

あなたの撮影した野鳥写真で支部のホームページのトップページを飾りましょう。今月の鳥写真募集専用フォームを利用して応募してください。

※詳しい応募方法は支部ホームページでご確認ください。



これからの掲載予定 (募集中)	掲載月	種類
	2017年12月	オオマシコ
	2018年1月	キジ
	2018年2月	シロハラ

■「大阪の野鳥図鑑」の写真も引き続き募集中!!

- 1 写真のファイル名に「鳥の種類」「撮影場所」「撮影日」「撮影者」を記載。
- 2 写真のデータは「JPEG ファイル」とし、長辺 1200px × 短辺 800px 程度の大きさとする。
- 3 データの受け取り方法
広報 G メール (mukudori-osaka@sun.gmob.jp) あて、又は郵送その他
- 4 募集期間は随時。ご協力よろしくお願いします。

(ホームページ運用グループ)

そんぐぼすと

会員のページ

■スズメの砂浴び

山口 講二

今年8月9日の16時頃、ベランダに出たカミさんが「スズメが凄いいからおいでよ」と呼ぶので出てみると、団地のプレイロットの砂場でスズメが群れて砂浴びをしていました。

見ていると追いかけてっこをしたり、一心不乱に砂浴びしたり、見ていて面白かったです。

残念ながら人が通りかかったので蜘蛛の子を散らすように飛び去ってしまいました。

この砂場では、ちよくちよくスズメが砂浴びするのですが、20羽を超すスズメが一斉に砂浴びするのを見たのは初めてでした。

スマホで撮った写真をお送りします。



■アオサギの渡り

小野 款司

奈良県五條市でタカの渡りを観察していた仲間が、双眼鏡で隊列を組んで飛ぶ鳥を見つけました。肉眼ではなかなか見えませんが、真上に来ると髪の毛のような細かい線が2本、ゆっくり動くのが見えました。写真を撮って調べると、アオサギの渡りである事が分かりました。アオサギは留鳥とと思っていましたが、隊列を組んで南西諸島かもっと南に渡るようです。



お便りありがとうございました。「スズメの砂浴び」はインスタ映えする楽しい画像ですね。またアオサギの渡りの写真には74羽もの姿が…壮観な渡りですね！

野鳥ニュース&トピックス

野鳥に関連する新聞記事等を読んだ感想、周辺情報などをまとめてお届けします。(広報G)

2017年8月～10月 大発見ネタを2題!

8/17

産経新聞

国内にカワウソ、38年ぶり

長崎・対馬で 琉球大チーム撮影

琉球大学の伊沢教授らが、ツシマヤマネコの生態調査のために設けた自動撮影装置に2月にカワウソが撮影されていたことを公表。昭和54(1979)年を最後に日本ではニホンカワウソの生息が確認されておらず、大発見。

しかし、朝鮮半島にいるユーラシアカワウソの可能性があり、今後、環境省が見つかったフンの解析や島全体での生息調査などを進めるとのこと。

10月12日には、複数のフンのDNAを調べた結果韓国やロシアに生息するユーラシアカワウソのオスのものということが判明したとの報道がありました。

9/16

読売新聞

「最も謎の鳥」生きていた?

100年ぶり確認か 豪南部で羽根発見

「世界で最も発見困難な鳥」と呼ばれる夜のオウム「ナイト・パロット」のものと思われる羽根が発見されました。

すでに絶滅されていたと考えられていた鳥の羽根が別の鳥の巣材に使われていたということ。

新聞には1枚の羽根とナイト・パロットとみられる鳥として緑色のオウムの写真が掲載されていました。

今回発見されたのは、比較的新しいナイト・パロットの羽で、100年以上ぶりに生息していることが確認されたとして大きなニュースになりました。調査が進み、生息状況が明らかになることが期待されます。

本 BOOK 鳥 Bird 本 Book 鳥 Bird

本の紹介

「鳥の正面顔」

大阪支部会員でもある鳥くんが同じく会員の木村壱典さんの協力を得て出版した本です。

可愛くもあり可笑しくもある正面顔の鳥たちの表情にいやされます。

玄光社 (2016/11/30)

♪鳥くん(永井真人), 木村壱典 定価 1728円 (税込)

ちなみに木村さんが協力された画像は、以下の鳥等23点。カラムクドリ、イワミセキレイ、ウタツグミ、カワビタキ、ヨーロッパムナグロ、インドガン、キョクアジサシなど、他では見られない珍鳥の正面顔が楽しめます。(HN)



例★会★報★告

2017.7.1 ~ 9.29

◎平成榛原子供のもり公園 <7/1>

参加者からのコメントは、22 ページをご覧ください。

◎バーディ 男里川 <7/17>

参加者からのコメントは、22 ページをご覧ください。

◎平日 京都御苑 <7/19>

暑い中、たくさんの方が参加してくださいました。今年のアオバズクは、宗像神社、母と子の森、近衛邸跡の三か所で、皆さんに見ていただけました。洞の中にいる雛も確認。コゲラ、エナガ、シジウカラ、ヤマガラ、セグロセキレイの幼鳥も観察できました。短時間でしたが満足感のある探鳥会でした。

◎平日 赤坂下池 ツバメのねぐら <8/2>

恒例の赤坂下池のツバメの罅入り探鳥会は、今年も多くのご参加がありました。夕暮れの、6時50分頃から池上空にツバメが集まり始めました。何度か右往左往と上空で舞った後、ヨシ原に舞い降りてきました。最後はそっと、フェンス越しにツバメの寝ている姿を観察しながら解散しました。

◎牧野 ツバメのねぐら <8/5>

枚方市周辺は一時間前までの豪雨が上がり、まずまずの観察日和と思われた。スタート直後にチョウゲンボウが上空を飛び、また送電線の鉄塔に止まるハヤブサを観察するなど、幸先よくスタートした。昨年と同じ場所、穂谷川河口よりやや下流で淀川の川原に降りてツバメを待つと、枚方市から対岸(鶴殿のねぐら)に急ぐツバメがパラパラ飛ぶものの、期待しているツバメの群れは近づいて来なかった。双眼鏡・望遠鏡で対岸を見るも、例年のようなツバメの大群の飛ぶのが見えないまま、ねぐら入り時間は終了した。おそらく鶴殿のヨシ原は広いので、ツバメのねぐら位置が昨年と変わり、一昨年の上流側に移動したためと思われる。

なお行き帰りにカラスウリの花の変化(行きに見たつぼみが、1時間後の帰りには白いレース状に開花)を観察できた。また「なにわ淀川花火大会」の花火が遠望できた。



◎バーディ 平城宮跡 ツバメのねぐら <8/11>

参加者からのコメントは、22 ページをご覧ください。

◎飛鳥 石舞台・祝戸 <9/2>

例年より3週間早い開催で、秋の気配が所々で感じられるものの、鳥の姿も声もまだ夏の様相。飛鳥石舞台でイソヒヨドリ、石舞台の芝生広場では、ハクセイレイとセグロセキレイの成鳥・若鳥、クヌギ林でイカルの声、冬野川でカワセミなどを確認。祝戸の芝生広場でネムノキの枝に止まるコサメビタキ、エゴノキの実を運ぶ多数のヤマガラをじっくりと観察。稲淵の棚田でモズの高鳴き。平田の集落では電線に止まるコシアカツバメ、上空を飛翔するクマタカを確認。鳥合せ後は、今を盛りのナンバンギセルの花を觀賞。



ハクセイレイ

セグロセキレイ

◎バーディ 曾爾高原1泊キャンプ <9/17-18>

参加者からのコメントは、22 ページをご覧ください。

◎平日 猪子山 <9/20>

天気は曇り。山頂に到着すると琵琶湖は雲で見えなかった。いつもと異なり、雲の中からタカが次々と出現しては田んぼや建物の上を低く飛んでいた。探鳥場所からすぐ近くの木でサシバがとまりゆっくりと全員が観察できた。昼食前後は動きがピタッと止まりその後、13時ごろから約300羽位が、頭上を次々と渡っていった。

双眼鏡でもしっかりサシバやハチクマが見られ、皆がタカ渡りを満喫できた。

(参考)

観察チームによる
カウント数

- ・サシバ 956
- ・ノスリ 2
- ・ハチクマ 53



ハチクマ

◎植物観察会 大阪城公園の巨石 <9/29>

快晴の観察日和、大阪城公園で巨石・巨樹+天守閣、そしてちょっぴり鳥も楽しんだ。現在の大阪城の石垣は、徳川家が、豊臣時代の城を埋め立て、各地大名の労力奉仕で建設されたとの説明から、スタートした。大阪城の京橋門・桜門・大手門にある巨石(大きさで No.1~11)や、工事を実施した大名を示す刻印が各所の石垣に打たれていることなど、日頃見ることの少ない巨石・石垣をたっぷり観察した。もう一つの観察主題としていた巨樹(幹周り3m以上の木)は、大阪城が太平洋戦争の空襲で焼けたことからほとんど無いことがわかり、天守閣前広場にあったイチョウ(幹周り365cm)で巨樹を知ってもらった。鳥はほとんど観察していないものの、秋の渡り鳥ヤブサメ・キビタキ・コサメビタキなど、15種を確認した。

■2017年 一般探鳥会出現鳥リスト<7月~9月>

●…多い ○…普通 ▲…少ない △…稀 ×…ごく稀

番号	種名	7月			8月			9月			出現回数
		1日	17日	19日	2日	5日	11日	2日	18日	20日	
		平成榎原子供のもり公園	バーデイ 男里川	京都御苑	赤坂下池	ツバメのねぐら	ツバメのねぐら	飛鳥 石舞台・祝戸	バーデイ 曾爾高原1泊キャンプ	猪子山	植物観察会 大阪城公園の巨石
5	○キジ							○			1
32	●カルガモ				○	○	○	○	○	○	6
62	●カイツブリ				○						1
74	●キジバト	○	○	○				○	○	○	7
127	●カワウ	○	○			○	○				4
139	○ゴイサギ							○			1
143	▲アマサギ							○			1
144	●アオサギ	○	○		○	○	○	○		○	7
146	○ダイサギ	○	○			○	○	○			5
148	○コサギ					○	○				2
174	●バン				○						1
202	▲イカルチドリ	○									1
203	○コチドリ		○								1
244	○イソシギ					○					1
293	○ウミネコ		○								1
340	▲ハチクマ							○	○	○	3
342	○トビ	○	○	○				○	○	○	6
356	▲オオタカ	○								○	2
357	▲サシバ									○	1
364	△クマタカ							○			1
374	▲アオバズク			○							1
383	○カワセミ	○	○		○			○			4
390	●コゲラ	○	○					○	○	○	6
397	○アオゲラ	○	○					○	○		3
401	▲チョウゲンボウ					○					1
407	▲ハヤブサ					○					1
420	●モズ					○	○	○	○		4
427	○カケス							○			1
435	●ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
436	●ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	8
442	●ヤマガラ			○				○	○		3
443	▲ヒガラ								○		1
445	●シジュウカラ	○		○				○	○	○	6
452	●ヒバリ		○				○				2
457	●ツバメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	9
459	▲コシアカツバメ	○					○	○			3
461	▲イワツバメ	○						○			2
463	●ヒヨドリ	○	○	○		○	○	○	○	○	9
464	●ウグイス	○				○		○			3
465	○ヤブサメ									○	1

番号	種名	7月			8月			9月			出現回数	
		1日	17日	19日	2日	5日	11日	2日	18日	20日		29日
		平成榎原子供のもり公園	バーデイ 男里川	京都御苑	赤坂下池	ツバメのねぐら	ツバメのねぐら	飛鳥 石舞台・祝戸	バーデイ 曾爾高原1泊キャンプ	猪子山	植物観察会 大阪城公園の巨石	
466	●エナガ	○		○							○	3
485	●メジロ	○		○				○	○	○		6
499	●セツカ		○				○					2
503	×キバシリ								○			1
506	●ムクドリ	○	○	○	○		○			○		6
549	○インヒヨドリ	○	○				○	○				4
552	▲エゾビタキ									○		1
554	○コサメビタキ							○	○	○	○	4
558	○キビタキ								○		○	2
569	●スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○		○	8
573	●キセキレイ	○						○				2
574	●ハクセキレイ	○	○			○	○	○	○			6
575	●セグロセキレイ	○	○	○		○		○		○		6
587	●カワラヒワ		○	○		○		○				4
602	○イカル	○						○				2
610	●ホオジロ	○					○	○	○			4
-	●ドバト	○	○	○		○	○	○			○	7
種数合計		29	19	18	9	22	21	30	22	13	15	-
参加者数		36	19	34	68	25	57	35	38	20	21	353

定例探鳥会の記録については、
会のホームページでご覧いただけます。
URL : <http://sun.gmob.jp/wbsj-osaka/>



探鳥会に参加しよう 探鳥会を楽しもう

- 「探鳥会」は、鳥に出会う「はじめの一步」です。翼を持つ美しい生き物「鳥」が、私たちのまわりにもたくさん暮らしていること、身近な自然とそこに暮らす鳥たちを身近に感じること、自然や鳥を知り、そして好きになって「守りたい」という気持ちが生まれること。
探鳥会を通じて、野鳥ファンの仲間を増やすことが、地域の自然を守っていく大きな力になると思います。ぜひ、みなさん、ご家族やお友達や知り合いの方に声をかけて、探鳥会にお誘いしてみましよう。
- 初心者の方にとって探鳥会は、鳥との接し方や双眼鏡の使い方、鳥の行動や見分け方、バードウォッチングのマナーなどを覚える大切な機会です。
- 探鳥会の楽しさは、たくさんの目で鳥を探し、出会いの喜びをリーダーや他の参加者と分かち合い、一緒に感動できることです。
探鳥会を通じて、たくさんの鳥仲間をつくりましよう！



植物観察会 大阪城公園の巨石 参加の皆さん

～平成榛原子どももり公園探鳥会に参加して～<7/1>

梅雨の時期でもあり、前日までの天気予報は弱雨でしたが、午後に時々雨がぱらついたほかは、晴時々曇りの暑い一日でした。

最初にリーダーからツバメ科の3種について説明があった後、民家の軒下の巣でツバメが抱卵している状況とコシアカツバメがビルの軒下の巣に出入りするのを観察しました。宇陀川沿いの道では、遠くにオオタカが飛翔し、キセキレイが電線上で鋭い声で囀っていました。さらに進むとイワツバメ数羽が低空で飛び交っているのを確認。しかし、皆さんが期待していたヤマセミは残念ながら出現しませんでした。

公園入口付近で昼食後、リーダーからハシブトガラスの幼鳥は、口を開けたとき中が赤いことやホオジロの仲間は上嘴と下嘴で色が違うことの説明を受け、それぞれ確認することができました。最後は、公園入口まで戻って鳥合わせをし、解散しました。 野村誠七さん

～バーディ・男里川に参加して～ <7/17>

鳥で一番面白かったのは、ウミネコの鳴き声です。本当に猫でした。声の高い猫でした。

またあの小さな干潟に何種類ものカニがいるのに驚きました。誰もハクセンシオマネキを捕まえられなかったの、僕はなんとかつかまえようとしたけれど、警戒心が強くて、足音や気配ですぐ穴の中に潜ってしまいます。けれど、最後に、女の子がコップを貸してくれて、お姉さんが巣穴をふさいでくれて、僕はシオマネキを追い込みました。宝を手に入れたような気持ちでした。

みなさんがいつもスコープで鳥を見せてくれて、僕はますます鳥が好きになりました。

これからもっと鳥のことを知ってその良さをまた人に伝えたいです。



岡漕人(こぎと)くん (小6)

～バーディ・平城宮跡ツバメのねぐらに参加して～<8/11>

・たくさんのツバメが見れてうれしかったです。また来年も行きたいです。 出口実くん(4歳)

・ツバメのねぐら観察に行つて、たくさんのツバメを見ることができてうれしかったです。たくさんツバメがいたのでみんな寝れるのかなと心配になったけれど、みんな寝れてすごいなと思いました。また来年もツバメのねぐら観察に行きたいです。 出口陽生(はるき)くん(小1)

・昨年初めて舟渡池でのツバメのねぐら観察に参加し、今年も参加させていただきました。夕暮れの中、ツバメが飛んでいる様子は圧巻でした。 出口お父さん

・今年も親子で楽しみにしていました。ねぐらまでの道中でも鳥、昆虫、植物のことを色々教えていただき、楽しい発見がいっぱいでした。夏の夕暮れの中、たくさんのツバメが飛び回る光景に感動しました。

～バーディ・曾爾高原1泊キャンプに参加して～

<9/17-18>

・一日目は雨で館内での自然発見オリエンテーリングをして、館内を走り回って楽しく過ごせました。二日目には晴れて、虫や野鳥を見れたのでうれしかったです。初めてキバシリを見れたので良かったです。 来年も行きたいです。 松浦智弥くん(小5)

・一日目は台風だったので、屋内で自然に関するゲームなどをしました。楽しみながら野鳥や自然のことを学べて、大満足でした。二日目は、曇りで雨も少しパラりましたが、アオゲラやキバシリなど、自然豊かなところでしか見られない数々の野鳥たちがいて、とても充実した観察となりました。 また是非行きたいです。 松浦史弥くん(中1)

・今夏、長男が野鳥の会に入会し、初めての参加でした。台風接近という厳しい天候でしたが、二人の息子は大はりきり。一番乗りで現地に着し、集合時間を待っていました。

一日目は残念ながら館内での活動でしたが、オリエンテーリングでは親子で館内を歩き回り、力を合わせて頑張りました。



リーダーによるゲームやクイズなどの楽しい時間で悪天候を忘れ、楽しく過ごせました。

翌朝、いつも朝が弱い息子達もすぐに起きて張り切って出発。昼までの活動で野鳥や虫、非日常の景色など、素晴らしい体験ができました。



これからもたくさんのイベントに参加したいと思います。

松浦崇さん(父)

また来年も、この景色を観に行きたいねと子どもたちと話しています。 出口お母さん





写真1 カモの親子 安威川

皆さんは写真1のカモの親子をどのようにご覧になるでしょうか。

写真1は、2017年6月4日に茨木市宮島3丁目付近の安威川で観察したカモの親子です。撮影しながら親鳥を見た時はマガモ♀と感じたのですが、ヒナを見るとカルガモの特徴が出ているのです。あれ、親はカルガモなのかと思いながらも一度見直すとマガモに見えます。嘴の状況や三列風切に褐色斑が見られることなど全体的な羽衣はマガモ♀なのですが、白っぽく見える媚斑はカルガモ的です。マガモとカルガモのヒナの違いは過眼線に現れ、後頭まで続いているのがマガモ（写真2）、目の後方で細くなり短いのがカルガモ（写真3）の特徴です。

今回観察したカモの親子はかなりマガモの特徴を持った雑種♀とそのヒナたちということになります。♂は子育てに参加しないので詳しいことはわかりませんが、ヒナがカルガモの特徴を明確に表していることから♂親はカルガモではないかと思っていますがどうでしょうか。



写真2 マガモの親子 安威川



写真3 カルガモの親子 安威川

参考文献:

氏原巨雄・氏原道明著「日本のカモ識別図鑑」誠文堂新光社 シジュウカラ第37号(2016年3月)吹田野鳥の会・会報

※注記 大阪府鳥類目録 2016 では、マガモは大阪では冬鳥で府内では繁殖しない（越夏個体が繁殖する可能性も低い）として、府内で繁殖が見られるのはアイガモであるとしています。生物学的には同種であり外観から識別できないこともあります。

観察 report 淀川でシロガシラが繁殖 松下 孝雄

2017年9月12日、鳥友からの情報で枚方の対岸、高槻市の鶴殿のシロガシラ夫婦を見てきました。

高槻でシロガシラ？と半信半疑でしたがやはりいました。♂♀のようです。エサをくわえて、何回も同じ場所のアシ原の中へ飛び込んでいきました。あとから来た人の情報によるとヒナ3羽がすでに巣立ちをしているとか。親はまだエサやりに必死の様子でしたが、ヒナの姿は確認できませんでした。

去年から滞在していたとか。今年は今2番子のヒナだとか。正しい情報かは不明ですが、そんなことを近くの方にお聞きしました。

大阪府鳥類目録によると2000年と2014年に南港で観察されていますね。繁殖の記録は大阪初！でしょうね。



虫をくわえている

日本では現在、沖縄本島など南西諸島に留鳥として生息する鳥であり、近年の大阪での記録（いずれも南港野鳥園で単独の記録）は、人為的に持ち込まれた可能性があるとして大阪府鳥類目録2016では「移入種」として扱った。日本での分布拡大の歴史は浅く（沖縄本島で繁殖が確認されたのが1976年、その後本島内で分布を拡大）、今回の繁殖記録も、自然飛来の個体によるものの可能性を否定できない。今回のシロガシラの繁殖は貴重な記録であり、詳しい状況を観察・把握されている方はぜひ支部まで報告いただければと思う。



シロガシラのつがい 高槻市淀川

鳥信 **こんな鳥観たよ!!**

■ 2017年7月～10月 (日本鳥類目録改訂第7版分類順)

◎スズガモ 9/17 住之江区平林貯木場 ♀1羽 (野村浩作)

◎ヨシゴイ 7/16 岸和田市久米田池 ♀1羽 (萩原貞範)
◎ミゾゴイ 7/29 和泉市父鬼町経塚山 1羽

山中に設置した野生動物調査用のセンサーカメラに5/28に写って以来2回目の記録。

センサーカメラには、ノウサギやニホンリス、タヌキ、アナグマ、アライグマなどが記録され楽しい。

(納家 仁)写真



29/07/2017 14:29:26 030°C

◎ササゴイ 8/6 富田林石川 幼鳥1羽 (山田文夫) 写真

◎ササゴイ 8月 住之江区平林貯木場 繁殖

2017年は第2貯木場北で1組、第4貯木場で2組、第5貯木場で5組、計8組の雛が孵った。いずれも貯木場の朽ちかけた木杭の上の巣で繁殖。(野村浩作)

◎アオサギ 7/17 平林貯木場 繁殖

貯木場の木杭の上の巣で仁王立ちするアオサギと雛を確認。同じ杭で2012、13年ササゴイも繁殖。(野村浩作)

◎ヒメアマツバメ 9/18 貝塚市内木積 幼鳥1羽

木積1494の路上で保護収容。台風による衰弱と思われる。残念ながら翌日、夕方に落鳥。外傷は無かったが左翼に異常あり

(久下直哉) 写真



◎ヒバリシギ 9/21～30 久米田池 幼鳥1羽

2013年11月以来の出会いだった。(山田悦三) 写真

◎アカエリヒレアシシギ 9/1 松原市小川町 1羽

小川町の池の淵、2m以内と本当に近くで、逃げることもなく。翌日は抜けていた。(福田幸充) 写真

◎アカエリヒレアシシギ 9/18、19 久米田池 1羽
久米田池では初めて観察できた。(山田悦三)

◎ハチクマ 9/24 大和川河口 1羽+不明2羽 渡り

◎サシバ 10/1 大和川河口 3羽 渡り

大和川でのタカの渡りは、自身初確認。(岡林 猛)

◎オオタカ 9/8 住之江区住吉公園 若鳥1羽

9月になってからよく飛来し、通過する。

(野村浩作)

写真



◎カワセミ 8/15 大阪市住吉川

カワセミがとんぼを捕獲(キャッチアンドリリース)。

(野村浩作)

◎アオゲラ 9/15 河内長野市岩湧の森

ホオノキの実を食べに飛来。(松井謙友・文子) 写真

◎チョウゲンボウ 8/13 忠岡町大津川 幼鳥1

川岸の電線に飛来。

(納家 仁)

◎チョウゲンボウ 8/27

枚方市穂谷 1

田んぼの近くの民家ベランダに虫(外来種のキマダラカメムシ)を見つけ飛来。しばらく眺めていたが、捕えずに飛去。(松下孝雄)

写真



◎サンショウクイ 8/27 枚方市穂谷 山中 6羽

ピリピリと時々小さく鳴きながら、高い木の葉っぱの中の虫を探し回っていた。(松下孝雄)

◎サンコウチョウ 10/3 淀川磯島地区 1羽

秋の渡りの途中のもの、翌日にはいなかった。

(松下孝雄) 写真



◎ツバメ 9/8 島本町 小規模な電線めぐら

3羽のツバメが夕方になるといつも同じ場所にとまり場にしている。

(栗原正大) 写真



◎ヒヨドリ 10/5 住之江区住吉公園 30羽弱

公園の樹木に、タッチアンドゴーで、西方向へ通過。

ヒヨドリの渡り?

(野村浩作)

◎コムクドリ 堺市大和川浅香山公園近くの中洲

通りがかりにムクドリの水浴びを見ると偶然にもコムクドリも水浴び。(野村浩作)

◎シロガシラ 7/16 高槻市鶴殿 (宇野日出男)

◎シロガシラ 9/12 高槻市鶴殿 繁殖 (松下孝雄)

※P18 観察レポート参照

◎ノビタキ 9/18 河南町寛弘寺1羽 (藤崎 裕) 写真

◎エゾビタキ 9/18 枚方市野外活動センター

◎サメビタキ 10/1 枚方市穂谷さくら広場

◎コサメビタキ 10/1 枚方市穂谷さくら広場

◎キビタキ♀ 10/1 枚方市穂谷さくら広場

枚方穂谷他のヒタキ4種です。(松下孝雄)

写真

◎コイカル 9/19 住之江区住吉公園 ♀1羽

朝、一瞬1羽を確認・撮影。

(野村浩作) 写真



ノビタキ 河南町 (藤崎 裕)



コイカル♀ 住吉公園 (野村浩作)



ホオノキの実を食べるアオゲラ♂ 岩湧山 (松井文子)

鳥信 投稿写真

2017. 7 ~ 10



ササゴイ幼鳥 富田林市石川 (山田文夫)



1	2
3	4

- ヒタキ4種
 1 コサメビタキ
 2 サメビタキ
 3 エゾビタキ
 4 キビタキ♀

枚方市穂谷他 (松下孝雄)



アカエリヒレアシギ 松原市小川町 (福田幸充)



ヒバリシギ幼鳥の伸び 久米田池 (山田悦三)

◇幹事会報告 (9月・10月) ◇

◆9月幹事会(9月5日 出席幹事14名)

【報告事項】主なもの

- ・連携団体全国総会 11/11～12に松岡支部長参加
- ・80周年記念事業 コーワ光学からの寄贈品について
- ・むくどり通信ネット印刷導入による経費削減について

【審議事項】主なもの

- ・自然史フェスティバル2017 講演関係
- ・80周年記念事業関連事項

◆10月幹事会(10月3日 出席幹事10名)

【報告事項】主なもの

- ・80周年記念事業の参加申込状況の確認、役割分担
- ・会員専用ホームページの開設について(本誌P18参照)

【審議事項】主なもの

- ・野鳥カード イベント配布用のものが不足 ⇒作成承認
- ・チュウヒサミット2017(11/18名古屋)参加について
清水、吉田2名分の旅費を支部負担

大阪支部・事務局だより

毎年夏が来ると「今年の暑さは格別ですね」と口にしがちですが、今夏はことさら堪える酷暑だったように思います。しかしありがたいことに秋は急ぎ足で訪れタカの渡りも早く目にすることができました。

そしてこのむくどり通信11月号が発刊される頃は80周年記念行事が無事終わったところでしょうか。『大阪府鳥類目録2016』しかり、80周年記念行事もたくさんの方々のご協力のもと準備してまいりました。事務局としても大きな仕事を終えほっとしています。今後の参考のためご意見、ご感想などをお寄せいただけるとありがたく思います。

先日ラジオ番組の制作にかかわる方が支部事務所へ来られました。ラジオで初心者の方へバードウォッチングを説明するための取材です。松岡支部長が対応されました。支部事務所のあるこの大阪市内でも鳥は観察できることにかなり驚いておられました。大阪では公園以外には緑が少なく都会に鳥がいるイメージが少ないかもしれません。しかし支部事務所が入る大阪ガスNEXT21敷地内のエコロジカルガーデンにはスズメ、キジバトはもとよりツバメも池の上を旋回しますし、キビタキ、ジョウビタキも確認されています。制作スタッフの方は「気づいていなかっただけで都会にもたくさん鳥がいるのですね。」と認識を新たにされていました。つい最近もNEXT21の3階辺りでイソヒヨドリが鳴いていたという報告もあり、海辺から内陸へ勢力を広げるさまも実感できます。

大阪府内のどこでタカ柱は見られるか、珍鳥出現情報はどうしたら得られるか、写真はないけどこんな鳥はなに?等々電話による無茶な問い合わせに相変わらず四苦八苦しています。何かのきっかけで鳥に興味を持ってくださった方と当会にご縁が生まれるのなら何よりも喜ばしいことです。80周年を迎え、初心忘るべからずの精神で対応できるよう心新たにします次第です。(田村貴子)

ご寄附8月～9月

20,000円:1名 5,000円:1名 納涼野鳥まつり寄付:10,350円
ありがとうございました。大切に使用させていただきます。

新入会の状況(616～9/15)

新しいなかま 正会員30名、むくどり会員8名

■カムバック・チュウヒプロジェクト 清水俊雄

■塚第7-3区7月～9月度調査報告

- ・7月18日 鳥類調査のみ(参加者4名)
 - ・8月22日 鳥類調査及び樹木伐採・除草作業(13名)
 - ・9月19日 鳥類調査及び樹木伐採・除草作業(14名)
- 6月以降の調査日にはチュウヒは出現しなかった。

■今後の鳥類調査及び樹木伐採除草作業の予定

11月21日(火)、12月19日(火) **調査・作業スタッフ**
南海本線石津川駅前9:00集合 **募集中!!**
連絡先:072-299-1779(清水)

■チュウヒが国内希少野生動物種に指定される

本年9月21日に「絶滅のおそれのある野生動物の種の保存に関する法律施行令の一部を改正する政令」が施行され、国内希少野生動物種にヘラシギ、チュウヒ、シマアオジの3種が新たに指定されると共に、オオタカが指定解除となりました。

同日開催された大阪府による「共生の森づくり植栽検討部会」で大阪支部からチュウヒが「種の保存法の国内希少野生動物種」に追加指定されたこと、チュウヒの生息できる場の保全と保護の必要性について説明しました。

■チュウヒサミット2017(11/18)詳細はP28参照

2010年以来、久々の開催です。今、チュウヒの生息環境が厳しい状況下、全国のチュウヒ調査・研究者が集まり「チュウヒの生態とその保護の進め方」をテーマに発表と討論が名古屋市立大学で行われます。大阪支部からは、カムバック・チュウヒプロジェクト(チュウヒの環境創出事業)について報告する予定です。

■80周年をPRして会員拡大を!!

会員数の減少傾向が続く中、80周年記念事業の一環で発刊した「大阪府鳥類目録2016」の正会員への配布などの特典をPRし、会員拡大の取組みを進めよう! お試し会員(むくどり会員)の皆さんで、目録を入手したい方は、ぜひお試し会員の期限到達時に正会員に切り替えてください。2017年度中に正会員に切り替えれば、もれなく目録をプレゼントします。

これまで、会員を増やす手段としてお試し会員(むくどり会員)への勧誘を進めてきましたが、今年度は、3千円相当の目録が無料で入手できる正会員への勧誘に力を入れたいと考えています。

会員の皆様も、目録の入手についての問い合わせ等を受けた際には、今年度中に正会員(下表参照;支部型会員又は総合会員)になればもらえるということをお伝えください。

【会員種別と会費】

赤い鳥会員 (支部型会員)	入会金1,000円+本部年会費1,000円 +支部年会費2,500円
おおぞら会員 (総合会員)	入会金1,000円+本部年会費5,000円 +支部年会費2,500円
特別会員で 支部にも入会	入会金無料+本部年会費10,000円 +支部年会費2,500円

※本部年会費は、小中学生半額、高校生以上の学生、70歳以上の方や障害者の方が1,000円割引となる制度があります。

次号 251 号 (1 月号) 予告

「大阪で見られるカモ・完全ガイド」

会員の皆さんが大阪府内で撮影されたカモの画像を使って、大阪版カモ類観察ガイドとして発行。お楽しみに。



「むくどり通信」は、みんなでつくる機関紙です！

身近なフィールドでの話題や旅行に出かけられた時のお話などを「そんぐぼすと」のコーナーにお寄せください。お便りやイラスト、写真、鳥や自然にまつわる俳句や短歌なども大歓迎です。

身近な場所で観察された鳥の情報をお寄せください

「鳥信—こんな鳥観たよ!!」への投稿を募集しています。大阪府内を中心にしてはいますが、府外での観察記録でも構いません。珍しい鳥の情報に偏らず、普通種の行動などの観察等の投稿もお待ちしています。珍しい鳥の記録の場合は、種の識別に有効ですので写真を添付いただくと助かります。

鳥信の送付はホームページの「鳥信募集専用フォーム」をご利用ください。トップページの「保護活動・調査活動」のところにカーソルを置くと入れます。

いただいた情報はできる限り「むくどり通信」に掲載するように努めますが、紙面の関係で掲載できない場合もあることを予めご理解ください。また画像は支部のホームページの野鳥図鑑にも利用させていただく場合がありますので、掲載不可の写真を投稿される場合は「HP 掲載不可」と添えてください。なお、サイズ縮小やトリミング等は広報 G に一任ください。

編集後記

◆このところイソヒヨドリがあちこちで見られるようになったと色々な人から聞く。その人達は皆さんうれしそうに語って下さる。我が家周辺でも数年前からよく目にするようになって、初めの頃は同様に喜んでいて。ところが今年は部屋のすぐ上で盛んに囀る。たまに遠くで聞くと「良い声だなあ」と思うのだが、頭の上で四六時中鳴かれると、声量があるだけに結構うるさい。野鳥たち、人というのは身勝手なものなのだよ。(もず)

★記念行事の準備で行き詰まり、近くのフィールドに逃避。ノビタキや若いハクセキレイがしばしの遊び友達。(つかぼん)

◎9月3連休、鳥観りに足を捻挫。人間(一部アスリートを除き)は鳥のようにうまく着地できないことを今さらながら実感。骨折は免れたが2週間のギブス生活。松葉杖での片道2時間の通勤はこたえました……。そんな中で発行の250号記念号。支部活動を支えてきた沢山の方の顔が思い出されノスタルジックな気分が引つ張られての編集となりました。100号記念号に藤原支部長が書かれている一言……「むくどり通信」の充実が会の充実発展そのもの……が身にしみる秋です。(HN)

■大阪支部事務所の開所曜日と時間について

- ・毎週火曜日・金曜日(10時~18時) ※祝祭日は開所
予告なく変更することがありますので、事務所に
お越しの際には事前にご連絡ください
- ・年末年始の開所日 年末は12月26日(火)まで
年始は1月9日(火)より

■大切なお知らせ 新年1月9日から支部事務所の
電話番号・FAX番号が変わります

電話：06-6766-0500 「ごひやく種」見たら

FAX：06-6766-0501 次は「ごひやくいち」

※支部事務所では傷病鳥やヒナ鳥の救護等に関する問い合わせ、珍鳥の生息情報に関する問い合わせには対応いたしませんのであらかじめご了承ください。

鳥を通じて自然に親しみ、自然を守る運動を広げよう。

自然を守るなかまは全国に約5万人。会員の皆さんが地域の活動を支援しています。

鳥を愛し、自然を愛するなかまをもっと増やそう。

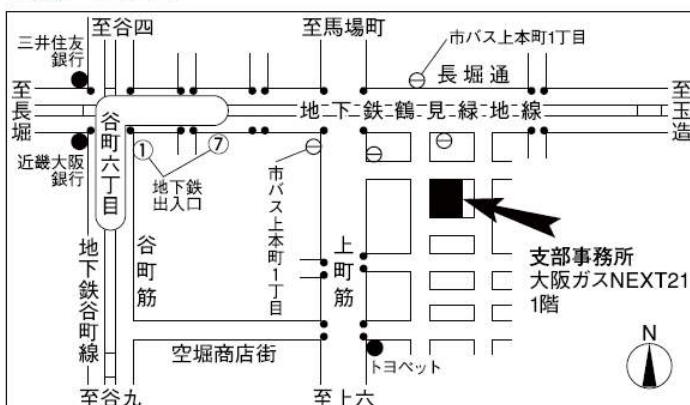
大阪支部のなかま
正会員+むくどり会員

1,952人

(2017年10月1日現在)

住所変更等の連絡のお願い

転居等でむくどり通信が届かず事務所に戻ってくるケースがよくあります。住所変更されたときは、本部だけでなく支部事務所にも一報入れていただければ幸いです。



日本野鳥の会 大阪支部報 むくどり通信 No.250(2017.11.1)

日本野鳥の会 大阪支部

〒543-0011 大阪市天王寺区清水谷町6-16 NEXT21・1F

TEL. 06-6766-0055

開館日時：毎週火・金：AM10時~PM6時

(ただし祝日は休館)

FAX. 06-6766-0056 (24時間受付)

e-mail: wbsj-osaka@sun.gmob.jp (大阪支部事務所)

mukudori-osaka@sun.gmob.jp (広報グループ)

URL: http://sun.gmob.jp/wbsj-osaka/

振替 00950-0-90551

編集担当：納家 仁、塚田順一、森山春樹

※ 記事、写真、イラスト等の無断転載・複製を禁ず。



18, 19 日 谷口高司鳥絵工房『谷口高司のたまご式鳥絵塾』
 18 日 「叶内拓哉とバードウォッチング」「野鳥の話アレコレ」
 19 日 大阪支部「はじめての鳥みたい(隊)!(探鳥会)」など
 詳しくは同封のチラシ又はフェスティバルホームページ参照
 ※両日ともに「関西文化の日」で博物館入館料は無料です

講演会 『ヤイロチョウ営巣発見 80 周年記念講演』

ヤイロチョウは、熱帯地域から日本などに飛来して繁殖する渡り鳥ですが、80 年前に四国の四万十川流域の森で最初に営巣が発見されるまでは、ごく稀に日本に飛来する迷鳥と考えられていました。妖精のように神秘的で Pitta Nympha の学名が付けられたヤイロチョウは、絶滅危惧種・高知県の鳥・四万十町の鳥などに指定されています。生息地の森や、台湾、中国、マレーシア、タイ、韓国などに出かけて解明した謎の生態を美しい写真と共に紹介します。

日時 11 月 19 日 (日) 13:30~15:30 参加費: 無料
 会場 大阪自然史博物館 本館講堂 定員 266 名 (先着順)
 講師 中村滝男氏 (公益社団法人生態系トラスト協会会長)、
 中西和夫氏 (公益社団法人生態系トラスト協会理事・写真担当)
 主催 公益社団法人生態系トラスト協会、日本野鳥の会大阪支部

80 周年つながりです
 大阪支部とヤイロチョウ



◎参加者全員に特製のヤイロチョウ・ポストカード進呈!

チュウヒサミット 2017

日時: 11 月 18 日 (土) 10 時から 17 時
 場所: 名古屋市立大学桜山キャンパス 研究棟 11 階講義室 (大)

■テーマ 「日本国内におけるチュウヒの生態とその保護の進め方について」
 チュウヒは環境省レッドリストで絶滅危惧 I B に指定されている希少種の猛禽類です。チュウヒサミットでは、全国からチュウヒ研究者や保護関係者が集り、保護の現状や生態に関する新たな知見が発表されます。

■発表内容 多田英行 (日本国内におけるチュウヒの生態について)
 先崎啓究 (北海道におけるチュウヒの生態について)
 浦 達也 (環境省作成の『チュウヒの保護の進め方』について)
 各地のチュウヒ繁殖地からの報告
 チュウヒの生態についてのポスター発表 (午前 10 時~12 時)

主催 日本野鳥の会愛知県支部、日本野鳥の会三重、名古屋鳥類調査会
 共催 公益財団法人 日本野鳥の会 詳しくは日本野鳥の会三重のホームページをご覧ください

※予約不要、どなたでも参加できます



日本野鳥の会 オリジナルカレンダー



ワイルドバード・カレンダー2018

【会員価格】
 通常価格 1,512 円のところ
 販売価格 1,296 円 (税込)

●テーマ「多様な風景 多様な野鳥」
 ●各月の鳥

- 1 月 オオマシコ、 2 月 マナヅル
- 3 月 ニュウナイスズメ、 4 月 クロジ
- 5 月 オオルリ、 6 月 オオヨシキリ
- 7 月 ツバメ、 8 月 チョウゲンボウ
- 9 月 メジロ、 10 月 キビタキ
- 11 月 ミユビシギ、 12 月 エナガ

お求めは日本野鳥の会オンラインショップ (<http://www.birdshop.jp/>) を ご利用ください



sun.gmob.jp/wbsj-osaka/

野鳥 大阪

検索

大阪支部ホームページでは探鳥会の案内やホットなイベント情報などを発信中!